

防衛大学校同窓会機関誌

小原台だより



給水塔から見た学生舎

同窓会ホームページアドレス：<http://www.bodaidsk.com/>
メールアドレス：honbu@bodaidsk.com

〔海外派遣部隊特集〕 スマトラ沖大地震・インド洋津波 国際緊急援助活動

- 頼りになる日本 ユドヨノ大統領も感謝 …………… 佐々木孝宣
- 感動と元気を皆さんへ …………… 稲葉 貞志
- 明日出発する・・・取り敢えず行くぞ！…………… 井下 佳久

新年のご挨拶



防衛大学校同窓会会長 佐伯 聖二

新年おめでとうございます。日本国内はもとよりイラクやインド洋上等遠く海外の各地でご活躍中の同窓生の皆様、平成18年の輝かしい初春を、それぞれ健やかにお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、わが国を取り巻く厳しい安全保障環境は改善の兆し無く推移し、テロや大量破壊兵器・ミサイル等の脅威は愈々深刻さを深めている状況にあります。加えて、米国のハリケーンやパキスタンの地震のような大規模災害こそ発生しませんでした。国内の各地で台風や地震等の自然災害にも見舞われました。

こうした中で、多くの現職会員の皆様は、イラクをはじめゴラン高原やインド洋での国際貢献任務や国内各地における災害派遣等で活動中であり、また退職会員有志の方々もカンボジア・アフガニスタン等で国際ボランティア活動に従事されておられます。このような国内外における同窓生の活躍する姿には、強い誇りと心強さを感じ、改めて敬意を表し、感謝を申し上げるしだいです。

また、郵政改革をはじめ公務員の定数削減等国の行財政改革が進められる中、自衛隊においても統合運用を目指し、統合幕僚会議の改編をはじめとする各種の改革・改編が進められており、陸・海・空自衛隊に勤務する現職会員の皆様は、その牽引役として重責を全うされ、頼もしい限りです。益々のご活躍を祈念して止みません。

さて私は、昨年4月に渡邊信利前会長（6期・陸）の後を受けて第17代同窓会会長に就任し、約8ヶ月が過ぎたところです。

私は、会長就任に際しまして、前会長が取り組まれた各種改革の継続とその充実・発展が重要と認識し、当面実施すべき主要事項として①財政基盤の確立、②母校との関係強化、③期生会との一体化、④地域・地区支部の充実、⑤MCI事業の推進、⑥新中期事業計画の策定を掲げて各種事業の運営に当たるとともに、プロジェクトチームによる同窓会のあり方検討答申の具体化について鋭意検討を進めているところです。

これらにつきましては、会長就任時に同窓会ホームページで挨拶として申し上げたところですが、その後プロジェクトチームによる検討等も進展し、将来の同窓会事業のあり方も具体的方向性が明らかになって参りました。

ここに、平成18年の年頭にあたり今後の同窓会活動に

ついて、所信の一端を含めてお知らせし、会員の皆様からの建設的なご意見が寄せられますことを願っております。

1 財政基盤の確立

前会長の就任以来、各幹部候補生学校を訪問しての会費納入依頼等の努力により会費納入率は着実に向上して参りました。特に、昨年の49期生（任官者）は納入率100%を初めて達成しました。一方、各期生会による会費未納者に対する会費納入の呼びかけも逐次成果が出てきているところで、今後とも各期生会との連携を強め財政基盤の確立・強化に努めて参ります。

2 母校との関係強化

母校との関係強化は、同窓会の重要な目的の一つである母校の充実・発展に直接寄与するものであり、同窓会事業の重要な部分を占めています。このため、今後とも学校当局との交流を密にするとともに、広く学生の同窓会に対するニーズを把握する等母校との関係の強化を図って、在校生に対する有意義的確、かつ在校生の眼に見える支援を実施してまいります。

3 期生会との一体化

個人情報保護法の施行による同窓会による会員名簿管理の困難化に加え、同窓生からの意見聴取や財政基盤の維持の必要性等から、同窓会活動の充実・発展のためには各期生会活動の活性化は不可欠となっております。このため同窓会としては、本部と各期生会との一層の連携強化を図るとともに、各期生会が実施する会員名簿管理の支援、ホームカミングデイ（HCD）やホームビジットデイ（18年度事業化予定、30期生対象）等の事業支援、会員相互の情報交換を密にするためのHP開設支援等を積極的に実施して参ります。

4 地域・地区支部の充実

現在、北海道から沖縄まで18の地域・地区支部が結成されてそれぞれ活動中ですが、関東地域をはじめ多くの地域・地区支部が未結成の状況にあります。

一方、同窓会活動の充実・発展のためには、各期生会活動とともに各地域・地区支部活動の一層の活性化が不可欠であります。このため、今後、会員の意見を聴取しながら、地区支部を統括する地域支部の統合化と退職会員による県単位の地区支部の設立を推進するとともに、各地域・地区支部における退職会員と現職会員の交流事

業の支援施要領等について検討し、各種事業の実施要領の具体化を進めて参りたいと考えております。

5 MCI事業の推進 (Military Cyber Institute)

MCIは「全国に散らばっている同窓生の軍事に関する識見を結集して国家・社会に対して軍事的考慮の重要性を正しく発信するメカニズムの構築」という提案に基づいて始められた創立50周年記念事業の一事業であり、記念事業委員会から引継いでMCI準備委員会において事業の具体化等を進めているところです。

本年度中には結論を出して、18年度以降、同窓会ホームページへのMCIコーナー開設やボランティア活動支援等の事業化を逐次進めて参りたいと考えております。

なお、任意団体である同窓会が会活動の運営資金を確保するために有料で行う『受託事業』の実現は、現在までの同窓生の反応等からすると当面は困難と考えられます。

今後は自主事業の進捗状況を踏まえながら、会員の皆様からの意見を積極的に聴取し、実現の可能性を見極めて参る所存です。

6 新中期事業計画の策定

昨年度は『同窓会のあり方検討委員会』から答申を受けましたが、本年度は年度当初に「将来事業検討チーム」を設置し、中期的観点から答申の事業化について検討を進めております。これらの事業化に当たっては、逐次、代議員会に提案し承認を得て推進して参りますが、同窓

会の長期的展望（会員数と財務基盤）からすると現在の各種事業をこのままで継続することは難しく、抜本的な見直しの必要性に迫られております。このため『会員相互の親睦及び母校の発展への寄与を主に、社会的活動への寄与を従にして、組織の充実とともに機関の構成・運営要領等の改善・強化（期生会との連携強化、総会の見直しと代議員会の充実等）、現職会員の同窓会活動への参画、財務基盤の確保と財務に応じた事業活動の展開等』を基本的な事業活動の考え方として、今後更に検討を進めて参る所存であり、会員皆様からの積極的なご意見をお待ちしております。

防大同窓会は、昨年度の「同窓会のあり方検討委員会」の答申に見られるとおり、大きな変革期を迎えておりますが、同窓会の更なる充実・発展のために、私は当面する課題に果敢に挑戦して、今後とも微力を尽くして参る所存です。

同窓生の皆様には、各期生会活動及び地域・地区支部活動に積極的に参加して頂き、同窓会活動の一層の活性化にご協力頂きますよう、切にお願い申し上げます。

最後になりましたが、わが国の平和と繁栄を祈念しつつ、同窓会会員皆様の新年のご健勝とご多幸をお祈りし、年頭のご挨拶といたします。

目 次

会長の年頭のご挨拶	2
-----------	---

海外派遣部隊特集	4
・頼りになる日本 ユドヨノ大統領も感謝	5
・感動と元気を皆さんへ	7
・明日出発する・・・取り敢えず行くぞ！	9

海外で活躍する同窓生	
・オヤジたちのささやかな国際平和協力	11
・アフガン武装解除監視に参加して	13

防大女子学生1期（40期）の今	15
-----------------	----

活躍する防大2世	17
----------	----

小原台は今	
・安全保障・危機管理教育センター	20
・顕彰室、新資料館内に完成	21
・アクアスロン大会で防大生健闘	21
・運動系校友会活動結果及び部員状況	22

同窓会事業	
・顕彰碑献花式	23
・タイ王国留学生歓迎会	23
・ゴルフ大会／囲碁大会／テニス大会	24
・第7回 ホームカミングデー／ ホーム・ビジット・デー／今後のMCI事業	25

期生会だより	26
3、5、7、13、16、19、28、36、38の各期	

同窓生アラカルト	32
「村井宮城県知事誕生」、「真のリーダーシップとは」ほか	

支部だより	40
北海道、北陸、関西、岡山、広島、 九州、鹿児島、沖縄	

会費納入のお願い	46
----------	----

同窓会本部・支部等の役員紹介	47
----------------	----

期生会会長・代議員名簿	48
-------------	----

お知らせ	
・小原台に連絡調整室を整備	49
・名簿管理に関するお知らせ及びお願い	49
・同窓会総会のご案内	50

❖ 海外派遣部隊特集 ❖

スマトラ沖大規模地震・インド洋津波
における国際緊急援助活動

輸送艦「くにさき」と
陸（CH、UH）・海自（SH）ヘリコプターの勇姿



「くにさき」艦上での陸・海合同



任務終了時の総員集合

頼りになる日本 ユドヨノ大統領も感謝

インドネシア国際緊急援助海上派遣部隊指揮官
(現練習艦隊司令官)

海21期 佐々木 孝 宣



派遣海上部隊の勇姿（手前から「くらま」「ときわ」「くにさき」）

平成16年12月26日、スマトラ沖大地震に伴うインド洋津波により、インド洋沿岸各国が甚大な被害を受けたことは皆さんも記憶されていることと思います。海上自衛隊は、テロ特措法に基づくインド洋派遣任務を終え日本に帰投中の艦艇3隻を急遽タイのブーケット沖に派遣し、生存者の搜索救助を実施させました。残念ながら生存者は発見できず50数体の遺体を収容しましたが、この迅速な対応は、タイ王国を含む周辺諸国の日本及び海上自衛隊に対する評価をさらに高めるものとなりました。

その後、我が国は津波の被害が最も甚大であったインドネシア共和国スマトラ島北部バンダアチェ周辺に、同国の要請に基づき自衛隊の部隊で構成する国際緊急援助隊を派遣することとしました。陸自は医療援助部隊と航空援助部隊を派遣し、空自はタイのウタパオからバンダアチェまでの援助物資の幹線輸送を担当することとされました。海自は、陸自国緊隊の人員装備等の海上輸送等のため、インドネシア国際緊急援助海上派遣部隊を編成し、第4護衛隊群司令を海上派遣部隊の指揮官として指定しました。

海上派遣部隊は呉を母港とする第1輸送隊（輸送艦くにさき）、横須賀を母港とする補給艦ときわ、佐世保を母港とする護衛艦くらまの3隻で編成されましたが、これらの3隻は第4護衛隊群の隷下部隊ではありません。海上自衛隊では同一の指揮下でない部隊間でも、日常的に協同訓練や合同訓練を実施し、また相互に部隊を研修し相互理解を増進するように心がけていますので、今回派遣部隊の指揮官に指定された時に特に不安はありませんでした。

海上派遣部隊の任務は、先に述べましたように当初は陸自国緊隊の人員装備を海上輸送すること並びに陸自国緊隊の活動の支援でした。この中で、宿泊等の支援は「く

にさき」で十分に可能でしたが、陸自装備品特に現地で輸送の主力となるCH-47ヘリコプターの長距離海上輸送は未経験のものでした。

部隊は、陸自国緊隊の物品等を搭載した後、1月12日「くにさき」「ときわ」の2隻は横須賀を、同14日「くらま」は佐世保を出港、同16日沖縄の南西で3隻が合流、陸自本隊の乗艦港であるシンガポールに向かいました。

1月21日シンガポールに入港、翌22日陸自本隊約200名が乗艦後出港、目的地のスマトラ島バンダアチェ沖向かい、同24日に同地着。直ちに「くらま」搭載HSに状況偵察を実施させたところ、発災後約1ヶ月が経過しているにも係わらず、バンダアチェ周辺の海岸線及び市街地は津波の被害により壊滅的な状況でした。この状況の下、バンダアチェ空港周辺では国連の機関や各国の軍人で編成された医療チーム等が多数活動中であり、今回の援助活動に国連を含む多くの国や地域が参加していることが容易に理解できました。

また、現場海域には、米海軍空母任務群や仏海軍巡洋艦、豪海軍補給艦、独海軍補給艦等各国の海軍艦艇が多数存在することが確認でき、あたかも各国海軍による「国際緊急援助五輪」の様相がありました。私も、現地到着後直ちに米海軍空母任務群指揮官を表敬し情報交換等を実施するとともに、仏海軍指揮官を同様に表敬し意見交換等を実施しました。仏海軍指揮官は返礼に「くらま」を訪れ、「くらま」給養員が心を込めて調理した海自伝統のカレーライスを堪能して帰艦しました。この様にスマトラ沖でも海軍同士の交流は活発に行われ、常日頃感じている「海軍は一つ」との意識をさらに強くした次第です。



LCACの揚陸作業を見守る母子



艦載機による救援物資輸送

現地では「くにさき」で陸自CH47、「くらま」でSH-60Jと陸自UH-60ヘリコプターを運用し、人員・物資輸送等の援助活動を実施しました。その後インドネシア側の要請により海自も直接援助活動に従事することとされ、「くにさき」及び同艦搭載のLCAC 2艇により、寸断されたスマトラ島北西部の道路修復に使用するブルドーザー等34両をバンダアチェから修復作業の現場まで輸送しました。「くにさき」及びLCACは完璧にその任務を実施しました。これらの緊急援助活動は現地で連日詳細に報道され、第2次世界大戦後のオランダからの独立戦争に旧日本軍が貢献した歴史も重なって、親日的なインドネシア国民は「日本は本当に頼りになる。」との印象を一層強くしたものと思料します。

さて、今回の自衛隊による国際緊急援助活動は、陸海空自衛隊がそれぞれの部隊を派遣し、統幕が現地におけるインドネシア国軍等との調整窓口業務を担当する等3自衛隊が同一任務を各々の特質を活かし極めて効率的に、成功裏に完遂しました。これは17年度末に実施される統合の先駆的な活動であり、当初は統合部隊を編成して活動に当たるとの意見もあったようですが、結果的には空自はタイのウタパオからバンダアチェまでの幹線輸送を担当し、現地バンダアチェ周辺では陸自と海自及び統合調整に当たる統幕が協同関係で相互に補完しつつ、援助活動を実施し、全てがスムーズに終了しました。



プレゼントを貰って喜ぶ子供達



被災地上空を任務飛行中の海（SH）・陸（CH）ヘリコプター

全ての活動を終了し海上派遣部隊は3月24日及び25日に日本に帰国、帰国後、陸海空の派遣部隊に対し防衛庁長官から第1級賞状が授与されました。

また、インドネシア共和国ユドヨノ大統領が5月31日に来日され、今回の援助活動にインドネシア国内で直接携わった自衛隊、外務省、日赤、NGO、NPO等の関係者を都内のホテルに招待し、直接感謝の意を表されました。この時、私ども陸海空自衛隊及び統幕代表の自衛官は、招待された多くの関係者の中で最初に大統領から挨拶を受ける榮譽に浴し、さらに大統領は関係者の前ではインドネシア語で感謝のスピーチをされ、通訳がその内容を日本語に訳しましたが、大統領が部屋を退室される際、私ども制服の陸海空自衛官に歩み寄り、英語で今回の自衛隊各部隊の援助活動を賞賛され、重ねて謝意を表されたことは、日本の自衛隊の活動が今回インドネシア国内で如何に高く評価されていたかを表したものであろうと、真に誇りに感じた次第であります。

最後に、派遣部隊が賜りました多くのご支援に対し心より御礼申し上げます。



忠魂碑と現地労務者の慰霊碑を清掃する乗員

2つの碑は昭和19年に旧海軍渋谷部隊が現地撤退の際に建立したものである。

現地労務者の慰霊碑もあったことから、感銘を受けた救援作業中のインドネシア陸軍工兵隊が倒れていた碑を建て直し補修したものである。

感動と元気を皆さんへ

スマトラ沖大地震国際緊急援助隊・航空援助隊長
陸24期 稲葉 貞志

1. 毎日が驚きと緊張そして感動

平成16年末のスマトラ沖大地震発生に際し、航空援助隊は17年1月12日、護衛艦「くらま」、輸送艦「くにさき」、補給艦「ときわ」を活動基盤とし、かつ陸自として初めてのヘリコプター海外派遣として横須賀を出港した。自衛艦旗への敬礼、パシー海峡の荒波、マラッカ海峡の船舶と南十字星、インド洋とアチエ沖の錨泊、パンダアチェ空港でのミルやハインドを含めた世界十数カ国のヘリコプターの離発着、アチエの人々と響き渡るコーランの祈り、そして被災地の筆舌に尽くせぬ凄惨さすべてが驚きと緊張の連続であった。隊員は皆「何とか被災者の役に立ちたい」と心に誓った。そのためには安全確実にヘリコプターを飛ばさなければならない。各セクション毎で全員自分が果たすべき役割を真剣に見つめた。陸海空の隊員の心は一つとなりその目の輝きと労苦を惜しまぬ姿勢に感動を覚えた。

2. 自衛隊組織は素晴らしい

航空援助隊92名は17年3月25日、輸送艦くにさきの母港呉からUH-60×2機及びCH-47×3機を北宇都宮及び木更津駐屯地に空輸しすべての任務を完了した。この間、総飛行時間約320時間をもって自衛官を含み延べ人員約1万名、物資約200tを空輸した。これは、陸海空各幕僚監部等上級部隊及び各所在駐屯地等の力強いバックアップによるものであり、OBを含めた自衛隊組織力に改めて感嘆するものである。



UHから救援物資を受領する被災者



被災地で救援物資をインドネシア軍と協同して卸す

3. 基本・基礎を状況に適合できたのは諸先輩のおかげ

本派遣の特性は、任務と態勢を具体的詳細にイメージアップできないまま準備を進め、状況の判明と並行的に活動を実施することであった。ハード的には艦艇に搭載可能な装備品等の範囲内で、ソフト的にはこれまで培った訓練・経験則内での行動であった。運用の基盤である操縦・整備・通信・管制・気象機能は未知の地形・気象の下、判明する状況に我々の基本・基礎を適合させ、ヘリコプターを安全確実に飛ばせる態勢へと進化させてい



救援物資とともに被災民や、復興技術者等を空輸中のCH機内



物資を空輸した際の現地の元気な子供達

った。隊員は状況不明下、広範囲に分散されてもやるべきことをしっかり把握しており、基本・基礎を状況に適合させ得る能力を有していると自信をもった。これまで諸先輩から継承されてきた訓練が正しかったと思った。

4. 現場部隊レベルでの統合運用は特段の問題なし

陸海空の文化の違いが喧伝されていた。小原台時代、何の違和感もなく生活した陸海空の同期生が、二十数年間の各自衛隊勤務により全く感性が違っているというようにも聞いていた。確かにそのようなことを感じる場面もあったが、それが部隊レベルで任務遂行の障害となるとは感じられなかった。例えば2月中旬、海上自衛隊が陸自支援という立場から任務実施（LCACにより道路修復に必要な重機等の揚陸、SHにより被災地への端末輸送任務が付与された）という立場に変化し、陸自ヘリコプター運用と競合が生じた。しかしながら、逆に正面から議論しお互いをより理解することにより、双方の任務がスムーズに実行できることを確認できた。そして、



雪の残る母港で別れを惜しむ陸・海の隊員



任務終了し防錆状態で輸送されるCH

空自がウタパオからアチェに万難を排して補給品等を空輸するとともに現地で激励してくれたこと、シンガポールでの退艦において、艦艇乗員から頂いた心からのセレモニーと自衛艦旗の寄せ書きを頂いたことに感動し、部隊レベルでは文化の違いは統合運用に問題を生じさせないと確信した。

5. もらった感動と元気を皆さんへ

アチェ州の被災された方々から「日本ありがとう」という言葉をたくさん頂いた。我々がお世話になったアチェの飛行場、サバン島には今でも旧海軍の慰霊碑があり、大切に守られていることを知った。身内を亡くしながらも力強く明るく生きている子供達の姿も目に焼きついてる。また、海上・航空自衛官から新たな感動を頂いた。もらった感動や元気を全国の小原台関係者に少しでも共有して頂ければ望外の喜びであり、このような機会を得たことに感謝申し上げるしだいである。



乗員の振る自衛艦旗に見送られ陸自基地に帰投するCH

明日出発する…取り敢えず行くぞ！

インドネシア国際緊急援助空輸隊第1次空輸隊長
(第1輸送航空隊司令部 防衛部長)

空23期 井下 佳久



「取り敢えず行くぞ」と小牧を出発

先般のスマトラ沖地震に際して、インドネシア国際緊急援助空輸隊の第1次隊長として派遣され、今回「小原台だより」への投稿の機会を頂きました空23期の井下です。私が国際緊急援助空輸隊長として航空自衛隊小牧基地を出発したのは、今年の1月6日ですが、実は空輸隊長を命ぜられたのは一日前の1月5日、C-130輸送機を保有する第1輸送航空隊の防衛部長として情報収集しつつ派遣準備をしていたところではありましたが、まさか自分が行くとは思っていませんから青天の霹靂です。当然、派遣要員も決まっていない、現地でのどのような運用をするのかも決まっていないという状況は、立場上十分過ぎるほど承知しておりましたので、翌朝には出発しな

くてはならないという事実に対し不安を感じたというのが本音です。

出発前日に他基地から小牧基地に集結した派遣要員（本部及び運航支援要員）とミーティングを持つことが出来たのは22時頃、それまでの間に本来の部長業務を実施しつつ、数本の予防接種を受けながら、空輸隊長として現地での任務に備えて各種準備…と、頑張ってはみましたが、先遣隊が現地に到着していない状況では、「明日タイのウタパオ海軍基地に向け出発する」こと、「現地での運用は行ってみないと解らない」こと以外に事実はないとの結論に到達するのに、さほど時間を要しませんでした。結局、運航クルーとの顔合わせは出発の朝になってしま



混雑するアチェ空港到着

いましたが、「取り敢えず行くぞ!」ということで、約40名の空輸隊が1月6日に、何とか小牧基地を出発したという次第です。

タイに到着したのは天候の関係もあり1月7日。その頃には統幕を中心とした先遣要員が設置した統合調整所(JCC)も活動を開始しており、また米軍を中心とした調整組織(CSF)も本格的な活動に着手していましたが、援助物資などの空輸所要も正確に把握することが難しく、また目的地であるインドネシアの空港が大混雑という状況であり、調整も混乱していたというのが事実です。

何とか1月10日に任務を開始したものの、結局その日はバンダ・アチェ空港に入ることが出来ずメダン空港からウタパオ海軍基地に戻りました。翌11日には上空で40分間待機しバンダ・アチェ空港に入ることができましたが、各国の航空機で大混雑の状況であり、地上支援器材も不足しているため誘導路脇には援助物資が山積みになっているような状態でした。他国の航空機も、混雑のため目的地上空から引き返すような状況は聞いておりましたので、驚きはしませんでした。きっと日本では「何で計画どおり飛べないんだ?」などと言われているのだろうと余計なことを考えてしまいました。その後も何度かバンダ・アチェ上空から引き返すような状況の中で、タイのウタパオ海軍基地からインドネシアのメダン空港及びバンダ・アチェ空港への空輸任務にあたりました。

1月中旬までは、調整にあたる隊員の睡眠時間が数時間というような日が続く混乱した状況で、このままでは空輸隊員の体が持たないのではと心配しましたが、上空から目の当たりにしたバンダ・アチェの被害状況、そして被災した人々のことを考えれば、出来るだけ多くの援助物資が届くようにとの思いで、各国の援助物資をはじめ、現地で活動する陸自派遣部隊への補給品、国連や各国援助部隊等の人員器材を空輸していました。空輸隊員も同じ思いで頑張っていたものと思います。幸いにもインドネシア国内の道路が復旧するにつれ急速に所要が減少し、米軍が撤収を開始した1月末には、インドネシア国内の空港も比較的落ち着いた状況となり、運航もスムーズになったことから何とか持ちこたえることが出来たと考えています。その後は、日本の民間企業・自治体等提供援助物資を民間航空機でタイに空輸し、それを自衛隊機が空輸するという、いわゆる官民一体輸送に移行し、ビスケット、防水シート等をインドネシアに空輸する任務にあたりました。この任務も搭載形態が民間と自衛隊が異なることから援助物資の組み替え等の苦労はありましたが、その任務を2月18日に第2次隊に申し送り、約1ヶ月半の任務を終えました。



汗だくで荷物組み替え作業中の隊員

今般のインドネシアへの国際緊急援助活動は、これまでの国際緊急援助活動とは異なり米軍を中心としたCSF及び統幕の設置したJCCと連携し、各国支援部隊等と協力して実施するという、航空自衛隊にとっても新しい形の任務であり、混乱した状況の中で最大限の援助活動を実施するためには、陸・海・空各自衛隊の連携はもとより、各国が連携することの重要性を痛感させられる任務でありました。特に、自分自身が輸送機の操縦者であることから、大量の援助物資を空輸する輸送機の能力を最大に発揮するためには、目的空港をいかに効率的に使用するかが重要であり、各国の調整が不可欠であると強く感じました。この貴重な経験が、今後の活動に反映されるよう私自身も努力したいと考えています。

最後に、準備の暇もなく全国から集まったにも関わらず、それぞれの職務における能力を最大限に発揮し支えてくれた派遣隊員に感謝するとともに、応援して頂いた小原台OBの方々に御礼申し上げます。この原稿を書いている間も、我が第1輸送航空隊はパキスタン国際緊急援助活動にC-130輸送機を派遣しており、指揮所で睡眠不足の勤務をしながら、ウタパオ海軍基地で汗をかき隊長と呼ばれた日々を思い出しております。



米軍を中心とする調整所にて

オヤジたちのささやかな国際平和協力 —JMASの活動



特定非営利活動法人「日本地雷処理を支援する会」
西元 徹也（3期応用化学・陸上）

日本は、国民生産額（GDP）、国連の通常予算分担率、政府開発援助（ODA）支出額の何れをとってもアメリカに次ぐ世界第二位の地位を占める冠たる経済大国で、世界に大きな影響力を持っています。約1億2810万人の人口を抱え、決して資源に恵まれていない島国日本がこのような発展と繁栄を遂げることができたのは、日本人の勤勉性と高い教育水準、そこから生まれた高い技術力、経済競争力にあると考えますが、それ以前に、エネルギーや各種鉱物資源をはじめとする資源への自由かつ安定的なアクセス、海外市場の安定的確保、日本と資源供給地や海外市場を結ぶ海上交通路の安全確保などが不可欠です。換言すれば、日本の発展と繁栄のためには国際安全保障環境が平和で安定していることが死活的に重要です。したがって国際安全保障環境の改善に資する「国際平和協力」は、「国際貢献」という他人事ではなく、自国の発展と繁栄に直結する国家の最も基本的な戦略行動と位置づけ、官民を挙げて主体的・積極的に取組むべきだと考えております。

その国際社会には、今日もお戦争や内戦の後遺症あるいは貧困や飢餓、自然災害に悩む多くの国々が存在します。このような国々の自立復興などに支援協力するため、日本政府は世界各地へODAを投入し、国連平和維持活動（PKO）、国際緊急援助活動、『対テロ対策特措法』や『イラク人道復興支援特措法』などに基づく諸活動を行ってきました。このような支援協力活動は、単に政府諸機関だけでなく、民間の諸機関や私たちのようなNGOにもできる分野があるはずです。

私たち「日本地雷処理を支援する会（JMAS）」は、自衛隊で培った技術や経験を生かして他のNGOとは異なる分野において戦争や内戦の後遺症に悩む人々の自立復興のお手伝いをしたいということで、自衛官OBが主体となり、退職金から資金を拠出し合って2001年9月に設立した組織です。

その最初の活動地域としてカンボジアを選びました。その理由は大きく二つあります。第1に、カンボジアは、インドシナ戦争、ベトナム戦争、ロン・ノルのクーデター、ベトナムの侵攻、クメール・ルージュの支配、これらに関連する内戦の結果、国内のいたるところに地雷・不発弾が存在し、国の復興を阻害し、人々の生命財産を脅か



大型爆弾の回収作業

しています。1979年から2004年までの25年間の地雷・不発弾による死傷者は60,000人以上に達すると報告されています。最近の5年間にも毎年約840人の高い水準で推移しています。このような人々の犠牲を軽減することは、日本人としては私たちにしかできない私たちの責任だと考えました。第2に、カンボジアはご承知のとおり1992年、日本が初めて国連のPKOに参加した国です。自衛隊のPKO部隊は、首都プノンペンの南方タケオ州を中心に活動してカンボジアPKOの成功に大きく寄与し、自衛隊の国際平和協力活動の基礎を築きました。しかし、それから10年近くが経てみると、当時の自衛隊の活動拠点タケオ駐屯地は廃墟同然に荒れ果ててしまっていて愕然とさせられました。私たちは何とかして自衛隊の大きな成果を受け継いで「日本の顔」をカンボジアに定着させたいと決意しました。

こうしてカンボジアを活動可能地域として選定し、2001年12月から翌02年5月まで四回の現地調査の末、カンボジアにおける不発弾処理活動からJMASの活動を開始することを決定しました。不発弾処理活動から開始することとした理由は、

- 地雷処理に比べ少ない資金で活動が可能なこと
- 比較的短期間に処理のための準備が可能なこと
- 最初の現地調査を行った2001年には初めて不発弾による犠牲者が地雷による犠牲者を上回ったこと
- カンボジア地雷処理センター（CMAC）の要請も不発弾処理にあったこと



今日の処理終了：子供達にも合掌で感謝の挨拶をする理事



雨季ぬかるみで苦闘する JMAS の車

などです。因みに、04年の891人の犠牲者のうち不発弾によるものは550人で、全体の実に61.7%に達しています。その多くは終戦直後の日本のように屑鉄がひとつの収入源となり、不発弾をいじったり、調べたりすることによって発生しています。貧しさゆえのことと考えられます。

カンボジアにおける不発弾処理活動は、カンボジアPKOからちょうど10年後の02年7月からメコン川の東側に位置するプレイヴィエン州で開始しました。04年からはスヴァイリエン州、カンダール州へ処理地域を拡大し、処理チームも2個チームから6個チームに増加しました。そして今年9月末現在の処理発数は60,000発を超えました。処理組織は、各州とも自衛隊OBの専門官の下に6名のCMACの処理要員と現地人のドライバー、通訳、警備員など合計12名を基準として編成され、これをプノンベン本部が企画・統制しています。現地スタッフを主体として編成しているのは、人件費、雇用機会の付与、現地への技術移転などを考慮した上のことです。

そのほか、JMASでは04年4月からアフガニスタンにおける旧軍（軍閥）の武装解除・動員解除・社会復帰（DDR）の国際監視団（IOG）を編成して監視を主導し、05年7月、無事に任務を終了しました。紙面の都合上詳細を紹介できないのが残念ですが、これはJMASの活動領域を上げたばかりでなく、日本の国益に適う画期的な活動だったと考えております。また現在、日本財団のご支援を得てラオスの首都ビエンチャンに本部を設置し、06年1月からのラオスにおける不発弾処理活動の準備を進めています。

このような活動が認められて2003年10月には「読売国際平和協力賞」を授与され、本年11月にはカンボジアで活躍した鈴木昭二専門官が社会貢献支援財団から表彰を受けることになっています。

以上ご紹介したJMASの活動は、外務省のNGO支援無

償資金を主体として、個人正会員475人、法人会員40団体、賛助会員900人強の浄財によって維持されています。この中には民間で活躍されている同窓生の経営される企業・個人、防衛大学校同窓生をはじめとする各駐屯地・基地の現職の組織・個人、自衛官OBが勤務する企業・個人などが多く含まれています。

私たちはこのような期待に応えるため、誠実、謙虚、献身をモットーとし、経費の出し入れに関して限りなく透明性を高め、現地で実際に活動する要員を除き、役員全員が無報酬で活動を続けています。今後も初心を忘れず全力を傾ける所存です。同窓生の皆様方におかれましては私たちの意のあるところをお汲み取りいただき、できるだけ多くの方々にJMASを知っていただくため、力強いお励ましとお力添えを賜れば幸甚に存じます。

(2005.10.28記)



500ポンド爆弾の爆破処理

アフガン武装解除監視に参加して

JMAS顧問・国際監視団長
園部 宏明（陸8期）

本年（2005年）七夕の日、アフガニスタンの首都カブールで行われた武装解除終了宣言式典に私は国際監視団の代表として同僚の田川氏（陸9期）およびドイツ人監視員とともに出席していた。

熱風が地面から湧き出てくるような暑い日であった。日射病にならないようにミネラルウォーターを時折飲みながら、カルザイ大統領の声に一心に耳を傾けた。式典に参加した目つきの鋭い髯だらけの将兵を前に大統領は何回も「日本」と言う言葉を繰り返した。同大統領の日本に対する感謝の念が大変深いことを改めて再認識するとともに過去1年以上にわたりアフガンの平和構築支援に微力ながらも貢献し無事任務を終えた心地よい疲労感とともに安堵の胸をなで下ろした。

私は自衛隊を退官後、ご縁があって日本地雷処理を支援する会（会長：元統幕議長 西元徹也氏、陸3期、理事長：土井義尚氏、同9期）に所属し、他の多くの同窓生ボランティアとともにNGO活動に参加している。

昨年3月、日本地雷処理を支援する会（JMAS）はアフガンの平和復興支援の中で最も重要なプロセスの一つである軍閥の武装解除監視業務を国連から受託した。

もちろんJMASが監視業務に適しているとの外務省の推薦があつての受託である。OBがこのような監視活動に従事したのはJMASの西元徹也会長がカンボジアの選挙監視団長をボランティアとして務めて以来のことであろう。

9.11米国同時多発テロ事件以降、アルカイダの根拠地であったアフガニスタンを二度とテロ活動の温床にしないために2002年以降国際社会は同国の復興を本格的に支援してきた。



国防省担当者と石岡監視団員（陸11期）：回収した自走高射機関砲等の前で



武装解除終了式典での担当の井上公使（向かって左）と筆者

なかでも大統領選挙および議会選挙の実施を可能にする治安の安定化が最優先の支援課題であり、それらは武装解除、新国軍の養成、警察の改革、司法制度の確立、麻薬対策の5つの分野にまたがっている。それぞれを日本、米国、ドイツ、イタリア、英国がリード国として分担して支援責任を果たすことを2002年のG7外相会議で国際公約している。

日本が担当する武装解除は各地域に存在する軍閥を解体しその将兵を社会復帰させることが目標である。

当初現地に出向いたOB全員が共通に抱いた疑念は各地域の経済活動も支配し、中央政府のコントロールに従おうとしない各軍閥の武装解除が本当にできるのだろうかというものであった。

まして現地に軍事的プレゼンスのない日本がこれら軍閥と政治交渉を行い武装解除プロセスの方針を策定し国防省等をリードして行かなければならないのである。

疑念を抱きつつもとにかく国連予算を執行できるようになると同時に我々は監視団本部をカブールに設立し、地方に派遣する監視チームを4個編成し監視活動を開始することとした。

各監視チームは国際監視員各2名、通訳1名、車両2台（ドライバー付き）、これに防弾チョッキあるいは衛星電話等の各種器材を装備化して編成し、特にテロ活動あるいは交通事故等に巻き込まれないように常に情報アンテナを鋭敏に維持しつつ活動することを原則として運用した。

活動間JMAS本部は一時代行された土井理事長及び末期に参加した松村興延団員（陸8期）を含め延べ5人の



武装解除に集合したムジャヒディン兵士と筆者

同窓生OBと2名の優秀な日本の青年を監視要員として派遣し活動を支えてくれた。さらに期間の長短はあるがドイツ、トルコ、カンボジア、ルーマニアの現役、退役、予備役軍人も監視員として参加しそれぞれ専門知識・経験を生かし大きな貢献をしてくれた。

各チームは毎日英文で監視結果を報告書にまとめ日本大使館を含む関係機関にメールで送付しプロセスの正当性、信頼性の維持に努めた。

もちろん現場で不正を発見すれば即正措置をとったことは言うまでもない。

また回収した武器をANBP（国連職員とアフガン人が運営している武装解除実行法人）と共同管理し新国軍へ移管する責任も継続的に果たした。

武装解除の進展を今振り返って見ると、本格的な武装解除が2004年3月に開始されたものの軍閥の抵抗により、当初の間、遅々として進まなかった。このままでは失敗に終わるのではないかと我々も危惧した期間が5カ月ほど続いた。しかし10月に実施された50年ぶりの選挙でカルザイ大統領が正式に大統領に選出されて以降状況が一変した。大統領の思い切った政治決断が武装解除プロセス進展に大きなうねりを起したのである。最大の軍閥指導者で武装解除に消極的だった国防相を内閣改造で更迭したのである。

其の決断には実に鮮烈な印象を受けた。指導者としての大統領の高い資質を見る思いがした。

正当な選挙で圧倒的支持を得て選ばれた大統領の自信と武装解除に対する信念がこの決断を可能にしたに違いない。また23年に及ぶ内戦で厭戦気分満ちていた国民がその決断を強く後押し支持したとも言える。

その後、軍閥のほとんどが短期間に逐次解散し最終的には6.4万人の将兵が武装解除された。回収され武器は軽火器が3.8万丁、重兵器が1万台（門）に及んだ。

これで大きな軍事衝突がアフガン国内で起きる心配はなくなったと確信できる。武装解除の経過を一年以上つぶさに観察していて歴史が創られて行くとはこのようなことを言うのであろうと実感した。どのように辺鄙かつ危険な武装解除現場であろうとも使命感だけを支えに任務を遂行した各OB監視団員もこの歴史を創るために不可欠な存在であったことだけは確かである。



兵士と田川監視団員（陸9期）

軌 跡

小平学校人事教育部補任教官室
1等陸尉 千葉 奈央

春雨の小原台で、散るまいと耐えているかのような桜の木々を見上げた平成4年の春。不安や希望といった様々な気持ちを抱えながら、誰もが通る自立の門をくぐりました。そんなたかだか十数年前の大学時代のことを、今ではもうよく覚えていません。それは悪い意味ではなく、それだけ密度の濃い時間がその間に横たわっているのだと私は捉えています。

幹候校卒業後、師団の通信大隊で小隊長や運用訓練幹部をさせていただきました。「部隊のために」「防大出身の女性幹部として恥ずかしくないように」とは言いながら、結局自分のことに精一杯で、周囲の方にさんざん迷惑をかけました。正直、この頃のことについては、もっとこうすれば良かった、ああすれば良かった…と、やらなかったことに対して後悔することばかりです。忙しさを理由に逃避していたのかもしれませんが。やったうえでの失敗に対する後悔よりタチが悪いといえます。

この後悔の対象には一定の傾向があります。“人の懷に飛び込む”ということです。“人に寄り添う”ことともいえるでしょう。訓練検閲での指揮とか、部隊の運用とか、各種計画といった業務的なものではなく、いかに仲間を思いやるか、いかに信頼関係を築いていくかということです。言葉にすると浅薄な印象になることは否めませんが、遙か昔から人間が取り組み続けてきた永遠の課題を前に、私は自分自身と向き合わざるをえませんでした。

例えば、小隊長時代のことです。体重が100kg近くあり体力検定にどうしても合格しない陸士長がいました。結果から言うと、彼は結局合格することのないまま退職しました。合否にかかわらず、努力したプロセスが彼の成長に少しでも寄与したのかが気になるのですが、今考えてもとても寄与したとは思えません。小隊の陸曹は、合格に向けて長期的なダイエット及び体力練成プランを立て、熱心に指導していましたし、私も彼を励まし見守っていました。しかし、最後の体力検定の1週間前、突然右手の感覚がなくなったと言うのですぐに受診させたところ、転換性障害と診断されました。転換性障害とは、ストレスや心の中の葛藤が身体の様々な症状に‘転換’されて、明らかな運動または感覚機能障害(声が出ない・歩けないなど)になって現れるというものです。

本人が甘えているといってしまうかもしれませんが、私は現在の自衛隊の組織としての指導形態の問題を象徴しているような気がします。

それは『人を成長させるには何が必要なのか』という視点の漸減です。

彼の場合、最後の体力検定は受験もできず、周囲からは詐病ではないのかと冷ややかな目で見られ、自信のなくなった状態で、新しい職場へ出て行くことになりました。体力検定合格のための指導場面を捉えれば、具体的な方法としての指導は十分に機能していたと思います。小隊長である私や陸曹達に足りなかったのは、彼の不安を汲むことと、彼が自律的に目標を定め、計画を立て、実行していくことを援助するという視点です。決められたことをただやらされる状態では、習慣化は可能でも、違った問題に直面したときに自分で取り

組んでいく能力は育ちません。

悪しき習慣は連鎖すると言います。そういえば私自身、大人になってから、不安を汲んでもらったり、自律的に考え行動できるような指導を受けていないような気がします。物事の考え方や業務の仕方を教えてもらったこと、役割、経験によりそれなりに成長してきたとは思いますが、一人の人間として育ててもらったという感覚がないので、自分も部下や後輩にどうしたらいいのかわからなかったのです。もちろんそこには、個人内要因として知らず知らずそういうものを拒否するような何かがあったのかもしれませんが、自分自身と腹を割って対話することが必要だと思いました。

そんな経験をした後、かねてから学びたいと思っていた心理学を、筑波大学の社会人大学院で勉強する機会を得ました。一人の人間として自分自身と向かい合う必要性を痛切に感じていた私は、心理学の中でも特にカウンセリングに興味を持ち、現在も在籍して勉強中です。

現在所属する小平学校では補任教官として人事課程を教育するかわら、駐屯地カウンセラーに指定していただき、カウンセリングを実施するとともに様々な課程等に対してメンタルヘルスやカウンセリングの教育をしています。最近では日本の組織でもカウンセリングを導入するところが増えました。自衛隊も例外ではありませんが、我々にはもともと仲間同士で切磋琢磨し、育て、支え合うという良き伝統があります。その仲間同士での信頼関係、言い換えれば人間として尊重し合う関係という基盤なしには、カウンセリングや各種サービスは付け刃にすぎなくなってしまいます。自衛隊の指導体制は今後変革していくのか、原点に還っていくのか、様々な考え方はあるでしょうが、根源的に目指すところは同じだと思います。組織としての機能の発揮と、隊員個人の幸福です。枝葉末節にとらわれず、常に組織として本質を見直すことができる自衛隊であって欲しいと思います。

私自身、これからの職業人生において何ができるのかと考えたとき、考えていることを形にするにはどうしたらいいのかわからなかったり、先が見えないことから不安になることが多いです。しかし、微力ながらも個々の隊員の「人間として」「自衛隊員として」の充実を援助していくことで、結果として組織にひいては社会に貢献できたら、という思いを強くしています。個人的なことでは、これから子供も産みたいと思っていますし、まさに現代社会の働く女性として、周囲に助けられながら自分なりの職業人としての軌跡を残していければと考えています。



検閲講評受け

防大女子学生1期(40期)の今

艦 船 勤 務



訓練支援艦くろべ船務長
1等海尉 清水 三穂

私は現在、広島県呉市の海上自衛隊基地を母港とする、訓練支援艦「くろべ」の船務長として勤務しています。艦船勤務はこれで5隻目となりますが、2歳になる娘と離れ離れの生活は初めてであり、今までとは違った生活様様をスタートさせたばかりです。勤務上、毎週のように娘に会いに実家へ帰ることもできず、ましてや洋上に出してしまうと頻りに連絡をとることもできないため、たまに2、3週間ぶりに娘に会うと、その成長ぶりに驚かされるものです。主人も現在、神奈川県横須賀市にありますが海上自衛隊基地所属の護衛艦「しらゆき」で船務長として勤務しており、今は互いのスケジュールになるべく合わせて帰省し、家族の結束(?)を確かめ合っています。

艦船勤務は体力的にも精神的にも辛いものがあります。特に女性となると乗組員の5パーセントにも満たないほど、まだまだ少人数ゆえに、苦勞も多いことと思います。しかし、私の場合はひとつ屋根の下、何日間も一緒に生活していると、主人と顔を合わせる以上に同僚と顔をつきあわせているからでしょうか、家族のような連帯感が生まれてくるもので、今まで楽しく勤務してきたのではないかと思います。また、周りの上司や同僚、部下に恵まれていたこともあってか、公私ともにサポートしていただいたゆえに、今日までやってこれたのだと思います。もちろん実家の両親が健在ゆえに、娘を預けて働くことができるのであって、両親には感謝していますし、最も協力的なのはやはり主人であり、艦船勤務ができるのも



航海指揮官立直中

主人のおかげだと思っています。

今後ますます女性の艦船勤務者が増えることと思いますが、まだ女性自衛官の居住区を備えた艦艇は少なく、私のような既婚で子供のいる幹部にとって、必ずしも働きやすい環境とは言えません。自衛隊という組織全体で、国が抱える少子化問題に対応すべく、女性の勤務環境を改善すべきであると考えとともに、私たち女性も、それに答えるべく努力すべきであると思います。

防衛大学時代には築いた先輩や同期、後輩との絆は、部隊に出た後様々な場面で私を助けてくれました。防衛大学校女子1期生として、私もこれから部隊に出ようという後輩達の何か手助けができるように、勤務したいと思っています。

陸海空の防衛大学校出身女性自衛官の皆さん、皆さんの活躍を期待しています。そして、女子1期生の皆さん、平成4年4月の桜満開の日に志したあの思いを忘れることなく、互いにがんばりましょう。

仕 事 と 家 庭



航空幕僚監部総務部法務課
1等空尉 坂本まゆみ



私は、現在、航空幕僚監部総務部法務課に所属しています。今年度末より、現所属の法務課としては首席法務官体制に移行し、自衛隊全体としては統合運用体制に移行するという大きな過渡期に勤務する機会を得、貴重な経験をさせていただいています。

また、市ヶ谷勤務の1尉のご多分に漏れず、防大校友会OB会などの集まりでは、庶務や会計といった仕事を

いただいています。防大生が研修で市ヶ谷に来る際、案内役のお声がかかることもあります。普段は深く意識することがありませんでしたが、こうした集まり等にお声をかけていただくたびに、いままで様々な組織に属し、多くの人と交流の機会を得ていたのだということを改めて強く考えさせられます。会食や行事等の機会を通じ、諸先輩方に興味深いお話をお伺いすることができました。さらに、こうした行事等の準備を通して、その「組織」の行事をいかに滞りなく行うか、あるいはその「組織」をどのように維持運営していくか、といった取り組みについて周囲の先輩方に混じって僅かながらも考えるという貴重な機会をいただいたと思います。

また、こうした機会のたびに高い関心を示され、必ず質問されるのが、同期を中心とした女性自衛官たちの状況、特に「家庭生活」についてです。

当時航空要員であった同期の女子学生たちは、現在、ほ

とんが「子持ち」であり、うち2人は「3児の母」です。形は違えども、それぞれ仕事に育児に奮闘しています。たとえば、私は、目下2歳の息子を抱えての勤務です。ちょうどいまが一番かわいい盛りですが、まだまだ病気をしやすい時期です。遠方に住む両親からは常に援助を得ることもできないので、技術幹部である夫と2人でやりくりをし、区役所仲介のサポート制度や民間のベビシッターサービス等を駆使しながら、急場をしのぐ毎日です。しかし、育児によって学べることは、質・量ともに膨大です。生活は、今までと比べて格段に「濃く」「深く」なり、効率的な時間の使い方が求められるわけですから、様々な面で今までとは異なる視点で見、取組むチャンスだともいえるでしょう。

最近、自衛隊でも、かなり多くの方が積極的に子供を育てながら勤務に励んでいます。仕事と育児の両立にはとく苦労話も多くなりがちですが、得るものも大きいものです。何より、少子化が進む現代日本社会にお

いて、社会を支える上で不可欠だといえるでしょう。むしろ、育児に関する貴重な機会に得た視点と経験をどのようにして組織運営に活かせるかという発想が今後重要になってくると思いますし、それがひいては組織としての強みともなりうるのではないかと思います。



活躍する防大2世

2世の宿命

43期 第1航空隊 1等海尉 頼経 孝二
(父：13期海 頼経日出男)

私は、表題にあるとおり父子2代に渡り防大を卒業し、海上自衛官として勤務しています。幸か不幸か、父が定年退職を迎える年に私が任官したため同じ職場で勤務することはありませんでした。現在、父が現役から退いて既に5年余りの歳月が経過し、少しずつではあるものの私自身も部隊勤務というものに分かり始めてきました。子供の頃には知ることができなかった父がどのような環境で仕事をしてたのかを自分自身で経験することは、世の中の親子でもそれほど多くないことだと思います。特に、私は父と防大の2世としてだけでなく海上自衛官、固定翼搭乗員、戦術航空士と要員や職域についても2世として引継ぎ、初めての部隊の配属先も鹿児島県鹿屋市にある第1航空隊と、ある意味宿命とを感じるほど父の足跡を辿ったかのような状況で勤務しています。ただ、今回の表題の「2世の宿命」とは、この意味ではなく、これほどまでに父が歩んだ道と同じ道をとると何かしら父と同じ仕事を行った人や父から教育を受けた人が部隊に数多くいて、しかも少し珍しい苗字の為にほとんどの人が父子だと気付いてしまうのです。そして、自分が知らない人から声をかけられては、「おまえのお父さんはな

あ…」と思い出話をされてしまという宿命です。特に、まだ候補生学校や練艦隊で近海練習航海などをしていたときに行われたレセプションでは良い標的で、普段であれば係わることがないような階級の方から声をかけられては思い出話や父の近況を尋ねられたものでした。しかし、このようなことは決して悪いことではありません。このような状況を自分の人脈を増やす良い機会と思って有効に活用したいと思います。また、自分が知ることがなかった親の違った一面を知ることができることもあります。私と同じように2世でしかも同じ要員を歩むことになる人にはこの宿命を都合よく利用して有意義な自衛官生活を送ってもらいたいと思います。



初機長フライト終了時の帰投報告

活躍する防大2世

活躍する防大2世

父と私と自衛隊

41期 第3補給処 1等空尉 鈴木 啓太
(父：13期空 鈴木 孝雄)

1 少年期のトラウマ

「選択肢は、一つでも多いほうがいいぞ。」

これは、私の防大受験のきっかけとなった父の一言でした。当時私は、絶対に自衛隊には入らない心に決まっていた。小さなころから転勤続きで、仲良くなった友達とも2、3年で離れ、幼馴染もないのは、自衛官である父のせいだとずっと思っていました。さらに、こんなエピソードもあります。父の百里勤務時代だったでしょうか？時々、家で宴会（よく言えばホームパーティー）があり、そんなときは、弟と2人で、19時か、20時頃には子供部屋で寝ようになっており、もし、夜見たいTV番組と宴会が重なればビデオ録画をしていました。ある日、その頃毎週楽しみに見ていた「ナイトライダー」というTV番組が、宴会と重なり、録画予約しておくことにしました。しかし、宴会で、ビデオカラオケをやることになり、私が、ビデオの再生準備を頼まれ、泣く泣く録画予約を取り消したという出来事が、今でもトラウマになっています。このようなこともあり、とにかく防大というか、自衛隊には、入りたくなかったわけです。

2 結局防大へ

小さなときの嫌な印象はありましたが、防大の入試を受けるだけならお金もかからないし、試験の雰囲気慣れるためのいい練習になると思い直し、何気なく防大を受験することになりました。何とか合格していましたが、このときも行く気はありませんでした。しかしながら、2月頃になって、自分の行きたい大学に不合格であったことを知りました。父は、防大でも、浪人でも自分で好きな方を選べと言ってくれていましたが、浪人してもう一年やるよりは、防大に入校した方が、自分にとって有益だと判断し、防大への入学を決意しました。

付け加えますと、私が防大の入校を躊躇していた原因の一つは、全寮制なので、上下関係や学生生活が絶対厳しいと考えていたことでした。父は、「全くそんなことはないよ。勉強も普通の大学生と同じだよ。」と私の不安を取り除いてくれました。が、父が持っていた防大の卒業アルバム（1学年の掃除風景やカッター訓練風景等が白黒写真であり、一層悪い印象だった。）を見せてくれたことや、1学年のときに中隊の1学年全員で屋上へ上がられ、増強運動？をしたという話を聞かせてくれたのは、防大への着校日も決まった後のことでした。



3 自衛官として

そんな私も現在は補給幹部として第3補給処で勤務しております。防大卒業後まだ10年たっておりませんがいろいろな経験をさせていただきました。3空団の燃料小隊長時代は、ちょうど大手企業の燃料談合事案で、各社に制裁が加えられていたときであり、燃料の契約が順調ではなかった時期でした。その頃は本当に天気を見ながら計画飛行時間の達成度を計算し、時には神様に祈りながら、小さなタンクを各四半期末には満杯にしておこうと試行錯誤しながら日々を送っておりました。

4高群時代には、米国後方幹部課程に留学させていただきました。約半年間、補給、輸送など米軍の圧倒的なパワーの源を垣間見てきました。授業は米空軍の少尉が対象のため、クラスに数人いる留学生のことなど気にもされませんでした。放課後スターバックスの机を占領し、一緒に行った同期と閉店まで予習復習をしていたことが今となってはいい思い出です。

また、現在の第3補給処では、イラク復興支援の第5期として、クウェートでの勤務を経験することができました。慣れない環境の中で、多くの人々に支援していただき、任務を遂行することができました。

4 おわりに

高校3年生のときに父が言ってくれた「選択肢を増やしておけ。」という言葉は、当時の私にとっては何気ない一言でありましたが、こうしてみると、本当に私の人生を変えた大きな一言でありました。そしてこの選択肢は今のところ間違っていなかったようです。これからの人生もいろいろな分岐点が出てくるでしょうが、ひとつでも可能性、選択肢を広げ、その中から最良の答えを選び出せるよう今後も努力していきたいと思っています。そして、私の子供にも、防大にいかうがいくまいが、「受験しておいて損はないぞ！」とその時期になったら言てやろうと思います。

オヤジの策略

44期 北部方面教育連隊 2等陸尉 萱沼 文洋
(父：15期陸 萱沼 周輔)

「別に自衛隊や防大にこだわる必要はない。自分の好きな道を選べ。」

とは、防大そして陸上自衛隊の大先輩である父の言葉である。自分の進路を模索し始めた高校時代、そして浪人時代に耳にタコができるほど聞いた台詞である。

「防大出身自衛官を父に持つ防大出身自衛官としての自衛隊勤務について思うところを述べよ」という任務を拝命したからには、勢い父のことを絡めずに語るわけにはいくまい。

私は防大に進学しようなどという気持ちは毛頭なかった。むしろ、防大だけは行くまいとして勉学にいそんでいた風もあった。しかし父の、「まあ一つ模試代わりに受けてみたらどうだ？」の常套的台詞に引っかかり、受験会場に足を運んでしまったのが運のツキ、あとはどっぷり防大、自衛隊の世界にはまってしまう、現在に至るという訳である。

AOC入校を来年に控えた身として当時のことを考えるに、この一連の顛末もすべて父の戦術的、戦略的行動の結果であったように思う。この場合目標（任務）として設定していたのは「息子を防大に入校させる」であると見積もられる。

任務達成に至る第一の布石は、冒頭に掲げた台詞である。一見理解ある父親の台詞に見えるが、その真意は「俺の息子であるからには天の邪鬼には間違いない。ここは強く防大進学を勧めるより、敵（息子）に主動性を保持していると思わせつつ、我の準備している地域に誘致導入するのがよからう」といったところではないかと推察される。

次に第二の布石として「自衛隊に慣れさせた」事がある。私の子供時代を思い出すにつけ、駐屯地で遊んだことや家に同僚の自衛官が大挙押し寄せて酒盛りを開いていたことの映像が浮かんてくる。このことにより、ともすれば子供にとっては抵抗感が生まれがちな「自衛隊、自衛官」に慣れさせたのではないかと思う。先日実家で発見して驚愕したのだが、私は幼稚園時代すでに将来の夢に「じえいたいのりくぐん」と書いていた。（本人はすっかり忘れていた）三つ子の魂百までと考えれば、この時点ですでに父の目標は概ね達成していたものと見積もってよいのではないかと思う。

ここまで状況を作れば、あとは浪人時代に日本酒の味を覚えさせるというささやかな援護射撃で、無事目標達成、任務完遂に至るであろう事は想像に難くない。事実この父の努力によって、現在私は充実した自衛隊生活を送っている訳であるから、感謝せずにはいられないのである。



父自衛官退官日（小平学校）

「任務完遂 ごくろう様でした。あと任せろ!!」

多少穿ったものの見方で筆を進めたが、父の真意がいかによ私のここまでの人生で常に感じていたのは、父の自衛隊、そして防大に対する愛情・感謝の気持ちである。常にエネルギーに働く現役時代の父の姿は、常に私の目標となっているし、どうやら弟もそんなことを感じているのか、陸曹候補学生から入隊し、今は陸曹航空操縦課程に入校中である。家族揃っての夕食ともなれば、自然と話題は自衛隊に関わることが多くなるし、酒が進んでくればいつの間にもやら食器が兵棋に変わり、またぞろ戦術講義が始まるといった具合である。

こういった時、父の経験や知識に触れ、自分の自衛官としての現在地を確認するにつけ、父の後ろ姿すら見えない事を思い知らされる。あらゆる事の奥の深さを教えてくれる父には、全くもって感謝しかないのだと思う毎日である。そして自分が父から得ているものを部隊に還元しようと、また日々努力しようと思う。

しかし、この記事が父が読んだ時には、「いいか、誘致導入っていうのはダナ…」とご指導をいただきそうではあるが…。



私と弟の嫁さんも増えて

「いつも宴会やってるような家族です」

活躍する防大2世

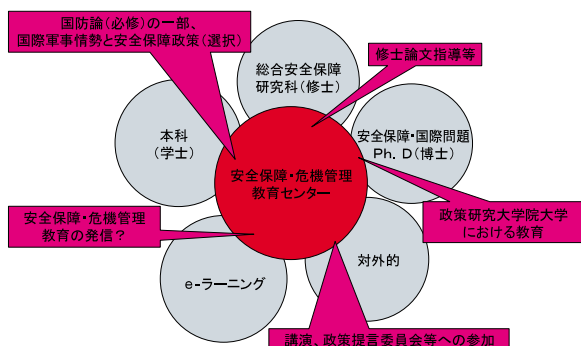
小原台は今

安全保障・危機管理教育センターについて

センター長 太田 文雄（海14期）

平成17年4月1日に防衛学教育学群の中に安全保障・危機管理教育センターが新設されました。このセンターは、昨今の国際情勢の変化や防衛力の役割の多様化を受け、幹部自衛官が実際に活動する新たな環境に即した教育を行うことを目的として創られましたものですが、本紙上をお借りしまして、本センターの役割等を御紹介したいと思います。

安全保障・危機管理教育センターの役割
(垂直五輪)



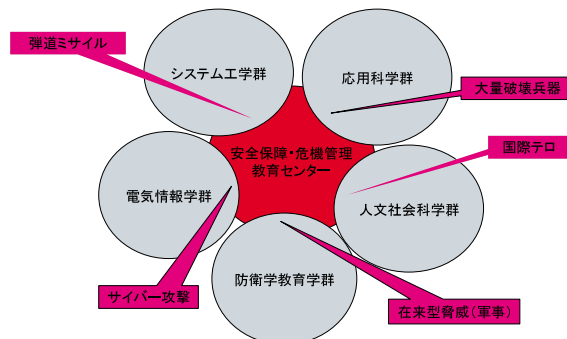
上図にお示しましたように、センターは本科学生に対しては、現在必修科目である国防論の一部をスポット的に受け持つと同時に、来年度からは「国際軍事情勢と安全保障政策」の選択科目を創設し、総合安全保障研究科学生に対しては修士論文の指導等に当たっています。また、平成18年4月から開始される安全保障・国際問題の博士課程を政策研究大学院大学で教えることにもなっています。さらに、センター長は毎年防大で行われている国際防衛学セミナーの事務局長や、市ヶ谷で行われて

いる「防衛大学校教授による現代の安全保障講座」の担当に指定され、また現在検討中ではありますが安全保障や危機管理に関するコンテンツをeラーニングとして校外に発信することも考えています。対外的には部外講演や政策提言委員会等への参加をしており、4月から約半年間で30回近くの講演を行ってきました。例を挙げますと平成17年6月にハワイで実施された太平洋シンポジウム（米国防総大学の国家戦略研究所と米太平洋軍のシンク・タンクであるアジア・太平洋センターの共催で約50ヶ国300人参加）ではセンター長が基調講演をしました。今後、読者の皆様の中から講演の御希望があれば、遠慮なく申し出ていただければ対応致します。

現在センター長の私以外に、8月に防衛研究所の総務課長から丸茂教授が着任しています。17年度予算では、もう一人の教授ポストと2等空佐の配置が認められており、年度末にかけて、実員が配されることになっています。

さて、現代は新たな脅威として、弾道ミサイルや国際テロ、大量破壊兵器の拡散、サイバー攻撃といったものになると思いますが、これらのノウ・ハウは、伝統的な脅威である軍事を取り扱ってきた防衛学教育学群以外にあります。即ち弾道ミサイルに関してはシステム工学群（航空・宇宙工学等）に、大量破壊兵器に関しては応用科学群（応用物理・化学・生物等）に、国際テロに関しては人文社会学群（国際関係・人間文化等）に、サイバー攻撃に関しては電気情報学群（情報・通信工学等）にあります。これらのノウ・ハウを総合的に融合させて、新たな脅威にどう対応するかを学生に教育していくことも「センター（中心）」のあるべき姿と考えています。

安全保障・危機管理教育センターのあるべき姿
(水平五輪-Interdisciplinary-)



今後とも皆様方の御指導・御鞭撻を踏まえながらセンターを発展させていきたいと思っておりますので、忌憚のない御意見をよろしくお願い致します。



2005年太平洋シンポジウムにおけるセンター長の基調講演

防衛大学校の顕彰室、新資料館内に完成！

井出・平位記



落成式の様子

平成17年3月14日に防衛大学校の資料館の落成式が行われました。資料館の2階に整備された顕彰室も同時に完成しました。

顕彰室は、創立50周年事業の一環として、防大同窓会が寄贈した「防大在校時や卒業後に殉職された学生、隊員88柱の氏名、期別、殉職者に関する記事を1柱一枚の黒御影石に刻銘された銘板を中心に300枚からなる石板を正面に据え、左右に顕彰室説明板及び顕彰データ検索装置等」が設置されています。

西原学校長は落成式の挨拶で「創立以来築き上げてきた防大の環境、施設、教育・訓練・学生生活等を知り、防大生、教職員の共有の体験として絆を強め、先に卒業又は転職なり退職した過去半世紀の全先輩と分かち合える心の財産となっていくことを……顕彰室も含めて防大同窓生の心のよりどころなることを期待したい」また「この資料館を防大の広報にも大いに役立てたい」と述べられました。

開館後は多くの方々が資料館を訪れ、11月12日・13日の防大開校祭時に見学者が1万人を突破しました。資料館及び顕彰室の設置の目的が着実に果されています。

今後、同窓生や各方面の方々の協力を得て、同館が防大の学生教育と学校広報の目的に沿って更に充実発展されることを祈念しています。

この資料館事業は、資料館事業委員会（委員長：訓練部長、副委員長：図書館長、作業部会長：田中宏巳教授）が担任した。



顕彰記念室

国際海軍士官候補生招待 アクアスロン大会で防大生健闘

韓国で実施されたアクアスロン大会（正式名称：国際海軍士官候補生招待第2回リースイシシ提督杯アクアスロン大会）において夏季定期訓練直後で十分な練習期間がなかったにもかかわらず防大から参加した選手が世界の士官候補生を相手に大いに健闘したとの話を聞き、特にお願ひして手記を寄稿してもらったものである。

（編集部記）

—● 自分を信じて ●—

水泳部競泳班 神所 篤史（海51期）

7月の夏季定期訓練前、防衛大学校に韓国のトライアスロン協会から国際海軍士官候補生招待アクアスロン大会への招待状が届いた。本アクアスロン大会は水泳1キロ、ラン10キロという過酷なレースであり水泳能力が不可欠であることから水泳部員の中から私を含む4名が選出され参加することに決まった。

走るのも泳ぐのも得意であったので世界の士官候補生にどの程度通用するのか挑戦してみたいという衝動に駆られ、また韓国という異国の地で日本とは異なる文化に触れてみたいという想いもあり大会への参加を喜んで引き受けた。

待ちに待った8月の中旬、我々は試合会場のある釜山近郊の統営市に向かった。現地に着き各国の士官候補生と顔を合わせてみるとアメリカ、イギリス、ロシア、エジプトなどの屈強な候補生達がずらりと並んでいた。180センチをゆうに超える身長、鍛え抜かれた筋肉、たくましい手足など我々日本人と比べるとまさに大人と子供の世界であった。何よりも彼らの見かけの強さに圧倒されてしまった。参加者は、その後集まった韓国の士官候補生20名が加わり6カ国で約40名程であった。

いよいよレース本番、高ぶる緊張と不安の中、ピストル音とともに試合が始まった。得意の水泳では最初から周りの実力を観察しながら泳ごうと決めていたので、体力を温存し余裕を持って泳ぐことができた。水泳が終わった時点ではおよそ10位くらいであった。水から陸に這



参加各国選手たちと

い上がると地に足が着かなかったものの冷静さを失うことなく落ち着いて迅速に着替え、外国勢との差を一気に詰めることができた。ランに移ってからは中学時代の陸上経験を生かし、コーナーの多いコースを最短距離で走り、自分のペースを維持しつつ先行する選手を1人また1人と抜き去った。気が付いてみるといつの間にかトップを走っていた。地元の人たちの声援が温かく感じられ、自分がその時日本代表として走っていることを誇りに思えた。これが愛国心なのかと肌で感じたのであった。しかし、トップに立ったのも束の間、ランで実力を持っていたイギリス及び韓国の士官に追い抜かれてしまった。彼らはいずれも海兵隊に所属しており、1人はたたき上げのイギリスチャンピオン、もう1人も優秀な韓国の海

兵隊員であった。何とか表彰台に上がることを目標に頑張り、その後順位は変わることはなく3位を最後まで守っていた。しかし、ゴール直前でコースを間違えるというミスをしてしまい、あと一步のところまで惜しくも6位に後退してしまった。

しかし、レースを振り返って自分に大きな自信と勇気を持つことができたと思う。当初は各国の士官候補生の外見にすっかり圧倒されてしまったが実際に勝負してみても自分の実力が世界の人たちを相手に十分通用することがわかった。相手が誰であろうと自分の力を信じて一杯最後まであきらめないこと、常に自分のペースでそして心のどこかにゆとりを持って挑戦すること。これは、私が韓国から持って帰った最高のお土産である。

平成17年度運動系校友会活動結果及び部員状況

17.12.1現在

校友会名	成 績	部員数		校友会名	成 績	部員数	
		男子	女子			男子	女子
応援団リーダー部	開校記念祭演武披露	18		銃剣道部	全日本青年銃剣道大会 男子団体優勝、準優勝、3位 全日本学生選手権大会出場 男子団体戦優勝	32	7
短艇委員会	全日本カッター競技大会 4位 関東地区カッター競技大会 準優勝	72		グライダー部	週末フライト訓練 5回実施	23	
バスケットボール部	男子 秋季関東リーグ戦 4部8位 女子 春季神奈川リーグ戦 2部5位	41	8	ソフトテニス部	秋季関東学生リーグ 8部3位	21	
柔道部	関東学生体重別選手権出場	45	5	ボクシング部	関東大学トーナメント戦 4部7位	56	
ラグビー部	関東学生クラブ選手権 3部昇格 関東リーグ戦 3部2位	149		レスリング部	東日本学生リーグ戦 2部3位	27	1
サッカー部	神奈川県大学秋季リーグ 1部5位	61		ボート部	全日本選手権大会出場	23	1
剣道部	全日本学生剣道選手権大会出場 関東理工系学生選手権大会出場	74	9	フィールドホッケー部	秋季関東学生リーグ戦 男子2部5位 女子3部2位	42	10
空手道部	全国国公立大学空手道選手権大会 団体組手優勝 秋季関東リーグ戦 男子2部優勝 女子2部優勝	66	6	ワンダーフォーゲル部	駒ヶ岳、丹沢山、槍ヶ岳、八ヶ岳等登山実施 高尾山トレイル大会出場	24	
バレーボール部	秋季関東リーグ戦 男子5部6位 女子8部7位	32	12	パラシュート部	日本選手権大会出場	17	1
卓球部	秋季関東学生卓球リーグ戦 5部3位	14	2	準硬式野球部	秋季神奈川七大学リーグ戦 3位	41	
陸上競技部	関東理工系学生大会出場 東京箱根間往復大学駅伝競走予選会出場	50	3	合気道部	全国合気道演武大会出場 全国学生合気道演武大会出場	65	1
硬式庭球部	関東理工科リーグ戦 男子6部昇格 女子9部2位	44	10	体操部	東日本学生選手権大会 団体12位	27	7
硬式野球部	神奈川秋季リーグ戦 2部優勝	39		弓道部	秋季南関東リーグ戦 男子1部3位 女子2部3位	30	5
射撃部	全日本学生ライフル射撃選手権大会出場	16		少林寺拳法部	関東学生大会 団体演武最優秀賞 全日本学生大会 団体演武最優秀賞	65	2
山岳部	鹿島槍ヶ岳、乗鞍岳、鳳凰三山、穂高連峰等登山実施	6		フェンシング部	全日本学生フェンシング選手権大会出場	18	
水泳(競泳)部	全国国公立大学選手権大会出場	29	2	ウェイトリフティング部	全日本大学対抗ウェイトリフティング選手権大会出場	20	
水泳(水球)部	関東学生リーグ戦 3部2位	19		相撲部	全国国公立大学対抗相撲大会 団体準優勝 全国学生相撲選手権大会出場 東日本学生相撲リーグ戦 2部8位	13	
ハンドボール部	秋季関東リーグ戦 3部昇格	24		バドミントン部	秋季関東大学リーグ戦 男子5部5位 女子4部4位	25	6
アメリカンフットボール部	関東学生リーグ戦 2部Aブロック4位	87		居合道部	無双直伝英進流居合道関東大会出場 自衛隊居合道全国大会出場	29	3
ヨット(小型)部	関東学生ヨット秋季選手権大会出場	17	1	吹奏楽部	開校記念祭記念式典・観閲式・定期演奏会実施	37	9
ヨット(クルーザー)部	イタリア海軍士官学校・リボルノ市杯国際 ヨットレース 10位	12	2	儀仗隊	開校記念祭記念式典・自衛隊音楽まつり参加	52	4

顯彰碑献花式

総務部 小津 記

タイ王国留学生歓迎会

事務局 企画 中治 記



留学生を囲んで

同窓会ゴルフ大会 ●●●●●●●●●●●●●●●●●●

今年で9回目を迎えた同窓会ゴルフ大会は、平成17年9月29日、千葉カントリー川間コースにて実施されました。

今年は、1期から15期まで144名の選手が参加し、過去最大の参加者数となりました。また、松本三郎前校長にも特別参加をいただき、盛大な大会となりました。

競技は、各期10名がプレーし、上位7名のグロス及びネットの平均により競い合う、期別対抗戦と、ラウンドコースごとに、グロス及びネットにより順位を競う個人戦で行われました。

選手は、爽やかな秋晴れのもと、各期の栄誉を担い、和やかな雰囲気の中にも、防大卒業生らしい鋭刺としたプレーを展開しました。

競技結果については、期別対抗戦グロスの部で13期が2連覇、期別対抗戦ネットの部では9期が通算2度目の優勝を飾りました。また、個人戦グロスの部では、9期の平佐幸政（西・東コース）、10期の光吉達幸（東・南コース）、12期の佐古春聰（南・西コース）の各氏が、それぞれ

れのコースで優勝しました。また、個人戦ネットの部では、10期の大内伸浩（西・東コース）、11期の梅沢孝雄（東・西コース）、7期の土井義彦（南・西コース）の各氏が優勝しました。

事務局事業担当

期別對抗戰競技成績

順位	グロス	ネット	順位	グロス	ネット
1 位	13期	9 期	9 位	8 期	15期
2 位	9 期	12期	10位	4 期	8 期
3 位	10期	7 期	11位	7 期	4 期
4 位	6 期	10期	12位	15期	2 期
5 位	12期	13期	13位	2 期	3 期
6 位	14期	6 期	14位	3 期	14期
7 位	11期	11期	15位	1 期	1 期
8 位	5 期	5 期			

期別对抗囲碁大会 ●●●●●●●●●●●●●●●●●●

第7回期別対抗囲碁大会が平成17年9月23日に日本棋院会館において1期生から15期生まで選抜棋士97名が参加して実施された。佐伯同窓会会長の挨拶及び高比競技委員長の競技実施上の注意に引き続き競技は開始され午前・午後2回の対戦を行った。競技は非常に熱のこもったものとなり、とりわけ6期生と7期生が優勝をめぐる激しく競い合い、4回戦が終了した時点で7期生が1勝の差で優勝を決めた。

対戦終了後、表彰式に移り高比競技委員長から優勝した7期生に優勝カップと副賞が授与された。引き続き懇親会が行われ、和やかな歓談のうちに本大会を終了した。

各期の成績は次表のとおり。

●は棄権

期	1	2	3	4	5	6	7	8
順位	10	3	3	5	7	2	1	7
期	9	10	11	12	13	14	15	
順位	5	7	11	●	11	●	●	

また、9月10日(土)には、防大囲碁クラブ主催により、同窓生22名による本因坊戦(個人戦)が、同棋院で行われ、7期の松井氏が優勝し第4代本因坊に輝いた。

上位者は次のとおり。

優勝（第4代本因坊） 松井 宏（7期）
準優勝 末田 八郎（14期）
3位 志賀 茂男（5期）

テニス大会

第8回防衛大学校同窓会テニス大会は5月14日(土)母校のテニスコートで開催されました。4月末に完成したばかりのオムニコート6面、花立ハードコート2面、防衛学館ハードコート1面の計9面のコートを使用し、1期から15期までの各期代表とそのご夫人総勢160余名(昨年度は約130名)が参加して100に及ぶ試合が実施されました。数日来曇りがちで肌寒い日が続いていましたが、当

日は終日好天に恵まれ、選手一同は日頃鍛えた腕を十分に発揮、また、準備段階から大会運営まで硬式テニス部監督、顧問、学生の全面的な協力支援が得られたお陰で成功裡に終了できました。競技終了後、本館地下食堂において表彰式及び懇親会を行い和やかなうちに大会を終了しました。なお、成績は次のとおりです。

	優 勝	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
レギュラーの部	12期	10期	14期	11期	15期	13期
シニアの部	5 期	9 期	7 期	6 期	4 期	8 期
ランドシニアの部	安部・服部組	杉原夫妻	稲見夫妻	井川・船山組	中川・中口組	

2005年度ホームカミングデイ 第7期生の番来る

なお、昨年度実施された第6期生のホームカミングデイも大変な盛会で、旧交を温められた方々が数多くおられました。また、西原学校長からも「・・・6期生の方々をホームカミングデイにとお招きしており、これらの大先輩も、若い後輩諸君を祝福して下さっています。・・・」

卒業学生：本科50期、理工学研究科前期43期、同後期3期、総合安全保障研究科8期

- 1 実施日時 2006年3月19日(日)
2 場 所
卒 業 式：防衛大学校講堂
観 閲 式：防衛大学校陸上競技場
総会・懇親会：防衛大学校学生会館

事務局事業担当

本事業の実施にあたり同窓会事務局は、16年度後期か

ら防大との調整を開始しその実施の大綱を定める等準備をしてきました。来年卒業後20周年の節目にあたる第30期期生会長（堀切光彦 1等陸佐：現第13普通科連隊長）に打診したところ、18年度実施の快諾を頂き、開校祭にあわせて実施するはこびとなったものです。現在その準備を実施中です。同窓会本部としても、卒業同窓生が実施していますホーム・カミング・デー（HCD）と同じように、本事業の成功を期すために予算等の処置をして支援することになっています。

事務局事業担当

MCI（Military Cyber Institute）事業は、防大創立50周年記念事業の一環として「同窓生の軍事に関する識見を結集して国家・社会に対して軍事的考慮の必要性を発信するメカニズムを構築してはどうか」という提言に基づき、平成15年度に準備委員会が発足し、平成18年度からの本格的な活動に備え種々の検討を行ってきた。

準備委員会では、MCI 活動を同窓会会員自身のためのサービスである「自主事業」と他の組織や個人から委託された活動を有料で行う「受託事業に」大別し検討を実施した。

ホームページサービス、掲示板サービス、軍事的知見保有者の紹介、軍事関連情報・資料の紹介などを行うための情報システムの構築を目指すこととされ、その一環として平成15年度に同窓会ホームページを開設しその維持・運営にあたる専従者1名を確保した。以降、同窓会ホームページは掲載記事の更新に努めるとともに、逐次その内容を充実すべく防衛関係の論文・資料等の収集・登録などの依頼を掲載している。

軍事専門家の派遣、軍事関係資料の紹介・翻訳などの防衛諸活動支援を実施することを目指し、人材の確保など実行の可能性について調査、検討を行った。その結果、同窓生の関心の度合いや反応及び経費等の面から受託事業を当初の平成18年度から実施するのは困難であるとの結論に至った。

受託事業については、自主事業での実績を積み上げつつ実行の可能性を見極め、段階的に推進する。自主事業は、管理運営組織を編成し提言をできるものから実行に移すこととし、主として次の事項を実施する。

- ① MCI 管理運営組織の編成
- ② MCI 専従者の確保
- ③ 同窓会ホームページに MCI コーナーの設置
- ④ 掲示板サービスの設定
- ⑤ 軍事関連情報・資料等の紹介のためのデータベース作成
- ⑥ その他：軍事的知見保有者の紹介、ボランティア活動志願者等の登録等

MCI担当 新治記

期生会だより

航空3期生会

会長 永島脩一郎

本年度の新生は第53期生、わが第3期生の入校から実に半世紀の時が流れ、後1年余りで同期生が一人残らず古希の壁を越えるわけで、身体的・外見上の加齢進化は近年顕著であります。航空3期シルバー軍団は、老いて益々盛ん！「古希70歳は人生僅か50年当時の事、現代なら100歳が妥当」と相変わらず意気軒昂で、第3の人生を謳歌しています。

さて、我々3期生は、平素から陸・海・空それぞれに期生会活動をしており、「小原台だよりへの投稿も個別に対応」で申し合わせましたので、ここでは航空3期生会の沿革・活動状況並びに会員近況等について御紹介します。

航空3期生会の歴史は古く、昭和41年に発足していますが、全国各地に点在する同期生の掌握・通信連絡が主たる目的で、当初は空自のメッカ浜松南基地に本部を置き、昭和43年から檜町（空幕）に移しました。当時は、転勤による勤務先・住所の変更が頻繁で、通信連絡手段も主に電話・郵便等で制約が多く、関係者は大変苦労していたのが思い出されます。

平成2年に、定年退職後の融和親睦を見据えて会の制度を確立し、新役員のもと新たな航空3期生会がスタートしました。余談になりますが、この機に会の名称を「一富士、二鷹、三なすび」から取って、「なすび」と呼ぶ事とし、以降このニックネームを航空3期の代名詞的に随所で使っています。

毎年度の事業計画は次のような内容です。

- ◇ 年次総会（4月：同伴）、忘年会（年末：会員のみ）
- ◇ 会報なすび発行（年間4回発行）
- ◇ 会員名簿・メールアドレス・電話連絡網の管理・配布
- ◇ 同窓会行事参加者への支援



航空3期生（総会）

なお、会費は事務の簡素化の狙いもあって、「一括払い」で事前徴収しました。

航空3期生会では、平成6年の総会で、会員及び同夫人の弔事に充てる会費（特別弔費）を徴収することを議決し、この会費を会の運営に支出する会費と区別して特別会計制度を設けました。この主旨は、会員・同夫人の高齢化に伴って増加が予測される弔事に対して、会の運営費を圧迫することなく弔費支出ができるよう、事前準備しておく事にあります。

次に、航空3期が、ちょっと自慢の「なすびネット」について御紹介します。ことの起こりは、今から9年前、平成8年にさかのぼります。当時、NECや富士通等の大手プロバイダが、有線放送まがいのパソコン通信サービスを始めたところでしたが、好奇心旺盛・新しい物好きの数名がパソコンメールの交信を始めたのがきっかけで、その面白さを伝え聞いてメール仲間に加わるメンバーが増え、平成9年暮れに有志9名で、メール交信・パソコン勉強会の「なすびネット」を旗揚げしました。それ以降、インターネットの急速な進歩やパソコンの普及と相まって航空3期のネット族が逐年増加し、本年9月末の「なすびネット」加入者は92名、通信連絡対象者117名の約80%に達しました。この「なすびネット」は、yahooのメールグループ（無料）も利用しており、Eメール担当役員がアドレス管理や問題解決を助言します。この同報システムは、航空3期生会事務局からの一斉連絡や、個人からの緊急連絡（計報等）に重宝しています。勿論、個人間のメール交信が中心である事は言うまでもなく、今や、「なすびネット」は、航空3期の重要不可欠な情報通信網になっています。

Eメールの「なすびネット」が普及定着するにつれて、画像・音声等の情報豊富な「航空3期のホームページ（HP）」への要望が高まり、なすびネット・メンバーが持ち寄った情報原稿を中心に、平成13年6月に「Nasubi world」の看板でHPを起ち上げ、航空3期生会主要行事、ゴルフコンペ、趣味、旅紀行等々、画像タプリの情報を掲載しており、本年4月には、「同窓会HP／同期会のページ」にリンクさせて載きました。

一方、「なすびネット」非加入者への対応も重要で、電話連絡網を最新に維持すると共に、年4回発行の「会報なすび」を印刷配布し、航空3期生会の活動状況や会員近況等の最新情報を提供しています。

航空3期生会としての活動の他に、「〇〇沿線会」と云った地域有志の集いや、ゴルフ愛好家によるゴルフコンペも盛んで、なかでも定年退職が話題に登り始めた昭和60年にスタートした「なすびゴルフ」は、江戸川河川敷の「越谷GC」を中心に年間5回開催、本年9月には第

79回の多くを数え、「4年後の第100回記念コンペは海外で」と頑張っています。又、西部地区なすび（九州・四国・中国）、毎年恒例のゴルフ会には、首都圏や中部地区からの遠征組の特別参加も多く、賑やかなコンペが開催されています。

最後に付言させて戴きます。既述のHPは、実は、現役員の一人でありこの紹介文を準備してくれた松岡正男君が、個人的に作成維持していたホームページを、我々の要望を快く受入れてくれ「航空3期のHP/Nasubi world」としたものです。今や、我々のHPなので自画自賛ということになりますが、素晴らしい出来栄えのもので、前述の通り、「同窓会HP」にリンクしていますので是非一度ご覧下さい。

5 期生会

会長 隈部 正則

5 期生会の皆さん、明けましておめでとうございます。輝かしい新春を迎え、益々ご健勝でご活躍中のこととお慶び申し上げます。

昨17年6月6日付をもって、福地建夫会長の後を受け会長に就任致しました。私にとっては身に余る重責ですが、新役員の皆さんと一緒に、4年間努めさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

私共は、昭和36年防衛大学校卒業以来、本年3月で46年目を迎えます。大半の皆さんが第2の職場を退職し、第3の人生に移行した段階だと考えます。やっと自由な時間が多くなり、同期生会に対しても、今までとは一寸違う想いになってきた人が多いのではないかと推察しております。

さて、5 期生会の運営につきましては、新役員一同、福地前会長以下旧役員の成果を引き継ぎ、充実している5 期生会の名簿・連絡網や新たに立ち上げたホームページ等を最大限に活用して、5 期生会の規約目的である「同期生の絆を更に強化」するための活動を積極的に推進してまいりたいと考えております。

また今後、「現状規模で5 期生会活動を維持・継続するためには、資金不足が見込まれ、この問題をどう処置するかが最大の課題」であります。役員でいろいろ検討してまいりますが、皆さんに良いアイデアがありましたら是非ご助言をお願い致します。

同期生会は、多くの同期生の参画意識と協力がなければ、うまくいかないと思います。皆さんに色々なご意見等ありましたら、前記のことだけでなく、いろいろな分野にわたり遠慮なく5 期生会役員の方へご連絡下さい。

私共役員一同、5 期生会のため精一杯努力致す所存ですので、同期生の皆さん方の絶大なるご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

7 期生会

理事長 出来 義彦

防大では、平成18年3月19日に記念すべき第50期生の卒業式が行われますが、我々7 期生は、この日に合わせて防大校長から「ホームカミングデー」にご招待をいただくことになりました。

期生会としても一大行事になりますので、すでに落合会長を準備委員長に、7 期生会本部役員及び東部支部役員が中心となって準備委員会を編成し、防大及び同窓会本部と連絡を取りつつ、先輩期の教えを請いながら、鋭意準備を進めているところです。

目下、事前に防大に提出する名簿の取りまとめ段階に入っていますが、参加希望者は、これまでのところ140名余りの夫人を含む総勢約360名の多くに達しています。

久しぶりに小原台を訪ねて一堂に会し、卒業式参列、観閲式見学等を通じて、新時代の母校と澁澁たる後輩達にエールを贈るとともに、期生会懇親会の方が同期生の絆を一層深める機会になればと考えています。

13 期生会

会長 山下 輝男（陸）

13 期生会からの連絡事項

13 期生も全て自衛隊を退官し、民の立場から防衛庁・自衛隊を支える立場になりました。今まで以上に同期生の絆の重要性・強さを感じつつある昨今です。

さて、昨年2月の陸海空合同の同期生会の時に約束した、我等がホームページを立ち上げました。陸の篠田君を長に、海の牧田君、空の四ツ家君が統合力を見事に発揮して今年8月に産声をあげました。防大同窓会のホームページ（<http://www.bodaidsk.com/index.htm>）にアクセスして、「同期生会」から「13 期生」にアクセスして下さい。合同のホームページでは、陸海空共通の話題や連絡事項等を主体に取り上げたいと思っています。掲載希望の場合には、篠田君（彼のメールアドレスは、同期生HPに記載されています。）に連絡して下さい。小さく産んで大きく育てたいと思っています。同期生諸兄の積極的な参画を希望しています。13 期生のページから、陸・海・空夫々のホームページにリンクしていますので、共々活用して貰えれば望外の喜びです。

小原台だよりの「同窓生アラカルト」欄に陸・海・空の同期生各1名を推薦して掲載して貰いましたので、同期の活躍ぶりを御確認頂き、声援して下さい。尚、推薦に値する同期生がおりましたら、その旨、会長（海：牧本、空：内山、陸：山下）宛連絡下さい。

さて、恒例の陸・海・空合同の同期生会を平成18年2月18日（土）15：00～、場所：第一ホテル東京シーフォート（品川区東品川2-13-5：今年と同じ場所）、会費は未

定ですが、概ね前回並みと考えて下さい。御夫婦での多数の参加を待っています。

16期生会だより

卒業して33年の月日が流れましたが、皆さん元気ですか。昨年あたりから定年退職者が徐々に増え、今年の10月1日現在で自衛官として勤務しているのは、陸海空総数約50名となりました。

今回は、「16期集いの会（仮称）」と「16期小原台の会（ゴルフ）」について紹介します。

①「16期集いの会（仮称）」について

現職会員が少なくなっていく中において、自由に意見・情報の交換が気軽にでき、かつ同期の絆を更に高める場として「16日」を同期が集まる日と定め、今年の5月16日に、取りあえず関東周辺の同期に声をかけた所、約40名が一同に会し楽しいひと時を過ごしました。

爾来、6月、9月と会を重ね、今後とも続けようと考えております。

その実施要領等は次のとおりです。

- ・開催日：毎月16日（平日のみ開催、ただし8月16日は実施しない）
（17年：11、12月）
（18年：1、2、3、5、6、10、11月）
- ・時間：18：30に開始、約2時間程度
- ・場所：新宿区市ヶ谷本村町4-1、「グランドヒル市ヶ谷本館1階（旧市ヶ谷会館）『ライオン安具楽』」03-3260-7311
- ・会費：約4千円
- ・担当：陸：石川由喜夫 y-ishikawa@sooshin.co.jp
090-4702-1733
海：高森 一徳 naomi-26@estate.ocn.ne.jp
045-337-2860
空：小原 信雄 nobuo.obara.mb@hitachi.com
03-4564-4973

東京に出張される時は、16日に合わせると同期にたくさん逢えるかも！！

再会を楽しみにしております。

②「16期小原台の会（ゴルフ）」について

約9年前の平成8年6月8日にゴルフの好きな有志が集まり茨城の「つくばねカントリークラブ」で始めたのが最初で、爾来2ヶ月に1回のペースで実施、今年で50回目を重ねるまでに至りました。この回は、年齢とともに衰える体力をカバーするとともに、気分転換を図り鋭気を養い、もって同期の団結を強固にする等の目的を持って始まったもので、その実施要領等は次のとおりです。

- ・場所：「つくばねカントリークラブ」…場所はほぼ固定

茨城県つくば市神郡2726（029-866-0244）

・時期：2ヶ月に1回のペース（終了後、次回実施日を決定）

・会費：約1万1千円（土曜日・セルフの場合）

・設営幹事：岩尾 幸博 iwabie@mua.biglobe.ne.jp

090-2655-2513

（連絡幹事：角田司、別司忠久、廣澤輝雄、黒川純一、荒巻正美）

・50回目実施日：11月12日（土）8：30スタート

陸・海・空の各部会から、腕に覚えのある者、最近始めた者、健康で楽しい休日を過ごしたい者、・・・奥さんも同伴でいかがですか）

19期生卒業30周年記念行事は盛会のうちに終了しました

19期生の皆さんお元気ですか。先にご案内した通り、平成17年4月28日（金）グランドヒル市ヶ谷において、御夫人を含めた約200名の参加を得て卒業30周年記念行事（総会・懇親会、記念CDの配布、記念植樹）を盛大に実施しました。平日であったため勤務の都合がつかなかった方、遠方に勤務方等参加できなかった方の懐かしい顔を見ることが出来ずにまことに残念に思いました。



総会においては、記念撮影、酒井健会長挨拶、角南俊彦発起人代表挨拶、事業報告を実施しましたが、今後の同期生会のあり方については、①会の性格を親睦会的なものに移行する。②原則として10年ごとに記念行事を開催する。③各自衛隊単位の活動を重視する。④役員として会長、副会長、理事を置くとし、新たな役員として次の方々を選出されました。

会長：酒井 健
副会長：角南俊彦（陸）、武田寿一（海）、岩崎 茂（空）
理事：風間敏策（陸）、松戸信三（海）、小野雅士（空）

また、同窓会本部からの防衛大学校同窓会のあり方に関する答申書「防大同窓会の健全な発展のために」を全員に紹介し、期生会として同窓会の健全な発展に貢献する事の意識を高めました。

総会に引き続き懇親会においては、まず9柱の物故者に対する黙祷を実施した後、武田寿一副会長による乾杯に始まり、いつの間にか学生時代に戻ったように懐かしい昔話に花を咲かせました。

特に写真撮影は盛り上がり、学生時代の教務班、校友会、3小隊など思い思いのグループで記念写真を撮り、各々旧交を温めました。

最後に懐かしい逍遙歌を全員で斉唱した後、岩崎茂副会長の万歳三唱で10年後の再会を誓い合いながら閉会と



なりました。

記念CDは、学生時代と現在の写真を比較させた名簿、学生時代と現在を比較させた小原台風景、諸行事、そして防衛大学校同窓会のあり方に関する答申書「防大同窓会の健全な発展のために」が掲載しており、特に退職者から感激の声？が寄せられています。また、総会・懇親会の様子も掲載してありますので、残念ながら参加できなかったか方はその雰囲気でも味わって頂けたら幸いです。

本来ならば参加者全員で記念植樹を実施すればよかったのですが、植樹の時期の関係で残念ながらこの時期に実施することが出来ず、防大在職の渡辺啓二君（陸）、若松静彦君（海）、高柳克也君（空）、横山久幸君（空）が同期生を代表して12月に桜を植樹することとなりました。母校を訪れた際には、是非確認して下さい。

総会で議決されたように、次回の総会の開催は10年後となりました。ほとんど方が第一線を退き、のんびりとした余生を送っている頃だと思います。それまで健康を維持し、再び懐かしい仲間に出会えることを楽しみにしながら頑張りましょう。（風間記）

28期卒業20周年記念パーティーを開催して

河本 宏章

○「イラクから乾杯！」で始まったパーティー

「乾杯！」この声はビデオから流れました。平成16年11月、都内の某ホテルで行われた、防大28期卒業20周年記念パーティー。この時、田浦期生会長はイラク復興支援のために第2代業務支援隊長としてイラクで活躍中でした。田浦期生会長は、遠くイラクからビデオレターで乾杯の音頭をとってくれたのです。「この乾杯で会はず上がる」、私はそう確信しました。

○20年経った顔

「おまえ老けたな～」、「おまえは全然変わってないな～」。あちこちからこんな声が聞かれました。陸自、海自、空自そして民間企業等、それぞれのところで20年間頑張っ

てきた、苦勞してきた証拠が2本、3本の皺となり白髪となり、あるいは光る頭となっていたのです。ただ、4年間一緒に過ごした防大生活の思い出は変わっていませんでした。

○昔話に花が咲く

卒業後20年経って初めて会った同期もいました。防大の時に大隊が違っていたために、名前さえ記憶から消えている者もいました。私も実行委員長として挨拶させて頂きましたが、多分、「あいつ誰だ？」と思った同期もいたはずです。

勉学のこと、訓練のこと、学生舎生活のこと、それから校友会活動のこと… 話は尽きませんでした。今、それぞれが何をしてどんな生活をしているかよりも、やはり、昔話をするのがみんな本当に楽しそうでした。古い言い方ですが、青春時代に戻った様な気分でした。

会が盛り上がってきたところで、もう一本のビデオが会場で上映されました。それは、防衛大学校で指導教官等として勤務している3人の同期が作成してくれた、現在の防大の状況についてのビデオレターでした。新図書館、新学生隊舎、女子学生が下級生を指導している状況等… いろいろ変わってはいましたが、なかなか横須賀に足を運ぶ機会のない者にとっては感慨深いものがあったと思います。

○防大卒初の県知事誕生（村井宮城県知事）

今現在、自衛隊においては、幕の班長、方面の課長、司令部の部長、主要部隊長及びそれぞれの分野の専門家として国の守りに就いています。また、民間企業等に就職した同期も、それぞれ主要な役職について活躍しています。中には、大きな企業の代表取締役となっている者、そして、つい最近では我が同期の村井君が、宮城県知事選挙において見事当選し、防大卒初の県知事となりました。村井君は、我が同期の誇りです。

各人進んだ道は違いますが、一緒に学び遊んだ4年間で培った絆は、一生の糧であることを改めて感じさせられました。

○「逍遙歌」による深い絆の維持

やはり最後は逍遙歌です。全員で丸くなって肩を組み、元応援団の前口上（途中途中途切れましたが・・・）に引き続き高らかに歌いました。防大4年間の生活が思い出され、目頭が熱くなり、防大に入校してよかった、すばらしい同期と知り合えてよかった、またこうやって同期と集まれてよかった、そんな思いを胸に抱きながらみんな歌っていたのではないのでしょうか。

○次回の同期会

こうして、盛会のうちに会は閉幕しました。次は、10年後でしょうか？20年後も、30年後も集まりたいものです。

防大28期生みなさん、また会える日まで、お元気で！

29期生会

副会長 城殿 保

29期生会では、平成17年7月、「防大卒業二十周年記念同期生会」を私学会館アルカディア市ヶ谷において実施しました。

今回は20年という一つの節目の行事として企画いたしました。この記念行事には陸・海・空それぞれ現職の自衛官をはじめ、民間で活躍している皆さん約160名が一同に会し、学生時代の懐かしい話や、近況などについて話の花を咲かせていました。前回の10周年記念同期生会以来、二回目の大きな集まりでしたが、「十年一昔」というように各人各様に時の流れの重さを噛みしめたり、ある種の充実感を味わっているように感じられました。

昨今の自衛隊の活動を見ると、イラク復興支援、テロ特別措置法に係る支援活動、国際緊急援助活動など、多様な任務に対応できるようになってきています。同期生の自衛官については、陸・海・空のそれぞれの部署で中核となって勤務しつつ、これらの任務に参加した者も多数含まれており、同期生会の場合でも、国内外の任務における経験談（自慢話？）や苦労話が話題の中心になっていました。OBの皆さんについても、厳しい財政環境下でたくましく活躍される傍らで、常に自衛隊の活動に気をかけつつ勤務している様子を感じ取られました。

激動の時代と言われて幾久しい感がありますが、いつの世も、その瞬間瞬間が「激動」なのかも知れません。しかしながら、幹部自衛官として、また、民間企業等の中核として活躍する同期生にとって、この十年間はまさに今までにない「激動の時代」であり「新しいこと」の連続であったように思われます。同期生の一人ひとりの顔には、新たな経験をいろいろ重ねてきたんだぞ、という自信が感じられ、一同に会することによって、むしろ、互いに勇気づけられたのではないかと思います。

また、参加できなかった皆さんのうちには、まさに勤務中の方も多く含まれていたり、一部は防衛駐在官等、海外にて勤務中の方もいたりといった状況で、20年の節目といっても、落ち着いてじっくり昔を見つめ直す暇などなく、むしろ、未だ走り続けているという感を禁じ得ません。現に、29期生会会長の馬場一佐（陸）についても、ドイツの防衛駐在官として在外で活躍しています。もちろん、国内に目を向けても、統合ないし各幕僚監部や部隊の枢要な部署で活躍しております。

防衛大学校の教育趣旨の一つとも言える、「陸・海・空の三自衛隊の軍種に対する相互理解に資する。」という観点からは、今回、このタイミングで記念すべき二十周年行事を開催できたことは非常に意義深いことと言えるでしょう。統合運用がまさに開始される時期に一同に会し、思い思いの経験を語り、旧交を温められたのは実にタイムリーであり、かつ、ある意味では非常にシンボリックなことではないかと思います。統合運用開始に当たり、現実的には様々な困難はあるでしょう。しかし、他方で



は、我々が20年前に防大の学舎で机を並べ、語らった日々の夢が、徐々にではありましようが、着実に実現していくことは大変喜ばしいことではないでしょうか。

最後に、殉職された同期生、逝去された同期生のご冥福を祈りつつ、29期生の益々のご活躍、団結を期し、期生会だよりとさせていただきます。

城殿 保（きどの たもつ）

航空幕僚監部 補任課人事第一班長（8-6-60251）

防大29期 応用物理学

36期生会

期生会会長兼陸上部会会長 足達 好正

36期同期生の皆さん、お変わりございませんか。今回、「小原台だより」の執筆依頼がありましたので、同期生会の活動状況並びに連絡事項について、いくつか述べさせていただきます。

現在の同期生会の活動は、基本的に毎年の名簿更新、冠婚葬祭にかかる電報等の業務を継続的に実施しております。この業務は、同期生会として可能な限り継続していく所存です。また、冠婚葬祭の祝電等の基準について一部誤解があるようですので、下記のとおり改めて連絡させていただきます。

祝電：本人のみ

香典等：本人、配偶者、子供

以上の基準で実施しております。我々も三十路半ばになり、会員御父母のご訃報を時折耳にするようになりました。しかしながら会則により、御父母については香典等の対象外となっておりますので、会員皆様のご理解を頂ければ幸いです。

また、本日はもう一件連絡事項があります。皆様ご承知の通り、去る8月7日に同期の下村泰央君が御逝去されました。御逝去に伴い、現在、陸上自衛隊にあっては、師団・旅団等の責任者を通じて、また海上・航空自衛隊にあっては各部会長を通じて、下村君の御家族を支援するための募金活動を実施しております。各責任者等には下記の「下村泰央君の御家族に対する支援について」を配布の上、募金をお願いして頂いておりますので、ご一

読頂き、改めて細部の趣旨をご理解頂ければ幸いです。
どうか皆様の温かい御支援をお願い申し上げます。

故下村泰央君の御家族に対する支援について

謹啓 残暑の候、皆様におかれましては、益々御清栄のことと存じます。

本年8月7日、私達の共通の友人でありました下村泰央君が、38歳という若さで御逝去されました。下村君は、平成4年陸上自衛隊幹部候補生学校卒業を皮切りに、第1普通科連隊小隊長・運用訓練幹部、幹部学校指揮幕僚課程学生、第28普通科連隊第4中隊長、第2次イラク復興支援群警備中隊長、第11師団司令部第3部訓練班長等を歴任され、今後益々の御活躍が期待されていた矢先の、あまりにも早すぎる突然の御逝去でした。

かけがえのない同期を失ったことは、非常に残念なことであり、今となっては、故人の冥福を祈るばかりですが、気がかりなのは、残された奥様と二人の幼いお子様の将来についてであります。我々防大同期生有志は、下村君の御家族が、できるだけ早く心穏やかに、安心して生活できるように、微力ながら支援したいとの思いに至りました。つきましては、下村君の御家族を支援するため、皆様の御支援を頂ければ幸甚に存じます。

防大同期生のみならず、趣旨に御賛同頂ける方は、下記の口座に支援金をお振り込み頂ければ幸いです。

記

郵便局 口座番号：00100-8-540973

口座名：「下村君の御家族を支援する会」

(口座名は便宜上、使用しております。)

一口 五千円

皆様の温かい御支援をお願い申し上げます。

敬具

発起人

防大36期陸上部会長 (第5対舟艇対戦車中隊長)

3等陸佐 足達好正

防大36期海上部会長 (護衛艦あけぼの砲雷長)

3等海佐 塩崎浩之

防大36期航空部会長 (第83航空隊302飛行隊)

3等空佐 寺崎隆行

各種問い合わせ先

足達 3 佐 8-18-3100

080-3489-9316

36期同期生皆様のご健康とご多幸を心より祈念しております。

38期生会

副会長 有馬 元

私たち38期が小原台を離れて早10年以上。気が付けば自分が小原台にいた頃にお世話になった指導官と同年代(若しくは上?)になっておりました。思えばこの10年、自衛隊を取り巻く国内外の状況は、めまぐるしく変化し、国民の自衛隊に対する理解も大いに深まっています。

そんな状況とは裏腹に、この10年間で38期生会は特に目立った活動もせず、同窓会本部の依頼に基づいて名簿の更新を図るのみ。

逆に会長から各自衛隊担当の代議委員にいたるまで、役員全ての一切の顔ぶれの変化を許さず、頑なに変化を拒んできました。

便利かと思いつち上げた「メーリングリスト」も当初は利用され発言もあったものの、登録している誰かのパソコンに侵入されたウィルスに傍若無人に荒られ、そして時間とともに忘れられ、今や風前の灯火。きっとこの文章が掲載された「小原台だより」が手元に届く頃には過去半年のアクセス状況から自然に削除されていることでしょう。

そんな38期生会が一念発起。なんと昨年「卒業10周年記念大宴会」を実施しました。(写真は、その時のものです。)

平成16年12月25日(なんでわざわざクリスマス?という意見もありましたが…)、場所は品川プリンスホテル。当日は、陸・海・空・民から多数の同期生の参加をいただき盛会となりました。久しぶり会う同期の面々。懐かしく、それでいて違和感なく語り合える不思議な感覚。今はそれぞれ違う場所で違う仕事をしているけれども、精神は一つ「ああ、小原台」。本当に楽しい時間を過ごす事ができました。

ただ残念なのは参加出来なかった同期も多数居たことです。でも次の同期会は、いつになるか分かりません。なぜなら今回の大宴会は「卒業して10年たったから、みんなで飲もうぜ!!」という、「会長」の『思いつき』だったんですから…。

そこで全国津々浦々でご活躍されている38期生の皆様に、38期生会に対するご意見ご要望等を広く募集致します。もっと期生会の活動を活性化しろ!だの(具体策が欲しいです。)、俺が宴会の幹事をやってやる!だの、内容は何でも構いません。皆様からの心温まる建設的なご意見ご要望を何とぞお近くの役員までお願い致します。役員一同心よりお待ちしております。



同窓生アフラハト

村井（防大28期）宮城県知事誕生

東北地域支部 勝 美 治（13期陸）



3期12年続いた浅野知事が、引退を表明し、10月23日宮城県知事選挙が行われた。立候補したのは、村井嘉浩氏（前県議会議員・無所属・自民党推薦・防衛大28期・45歳）、前葉泰幸氏（元自治省官僚・前宮城県総務部長・43歳）と出浦秀隆氏（前高教組委員長・共産党

推薦）である。

村井氏は、県議会議員3期、その間、自民党宮城県連の幹事長を2期務めた。

自民党県連の幹事長というのは、全国どこでも、60才台がほとんどである。

そんな中、村井氏は、40代の若さで自民党宮城県連の幹事長を務め、前々知事のゼネコン汚職以来、衰微の一端をたどっていた宮城県自民党の立て直しに、政治手腕を発揮した。

村井氏は、「ぶれない政治家」（しっかりとした政治理念を持つ政治家）として、周囲の信望を集め、自民党推薦・無所属で出馬した。

新聞は、「知事選は、事実上、自民党と浅野知事の全面対決の様相を呈した」と評し、「村井さん、組織力で勝利」と当選の見出しを掲げている。

自民党県連の候補者選考作業が遅れ、村井氏に決定したのは、告示2日前と出遅れた。

一方の前葉氏は、早くから立候補を表明し、「浅野県政の後継」を表明し、着々と選挙態勢を整えていた。

しかも、浅野知事が、前葉氏の応援に乗り出し、前面に立って、二人三脚で選挙戦に乗り出した。浅野知事は、全国でも、名を知られており、宮城では、カリスマ的存在で、圧倒的人気を誇る。

村井氏は、地元宮城野区、自衛隊関係者、県政に携わる一部の人々、そして、地元経済界などには、良く、知られているが、全県的な知名度がない。

郡部は、自民党の組織力を生かして、知名度の浸透を図り、村井氏有利の体勢を築き上げた。しかし、100万都市仙台は、浅野知事の知名度に乗った前葉氏有利と伝えられた。自民党中央が危機感を募らせた。

神奈川の補欠選挙と同じ日に行われる選挙で、国会開会中にもかかわらず、武部幹事長・安倍幹事長代理（当時）・二階総務局長（当時）・中谷元防衛庁長官など首脳部が駆けつけ応援を実施した。村井氏が、自民党宮城県連幹事長時代に築いた中央とのパイプによるものだろう。結果は、村井氏約36万票、前葉氏約31万票と5万票の差をつけた。

村井氏は、情報公開など浅野県政を評価しながらも、是々非々の立場で、「脱『官力』（村井氏が打ち出した造語で民間の力の活用といった意味）のキャッチフレーズの下、副知事など主要ポストに民間人の起用、産業振興

による宮城ブランドの確立」などを打ち出し、県民の広範な支持を集めた。仙台市など都市部で対立候補と均衡に持ち込み、郡部で圧勝した。

「元氣、明るさ、若々しさ」で、老若男女を問わず、会った人を魅了するキャラクターをもちソフトで謙虚な反面、防衛大～自衛隊～政治家と信念を持って行動してきた人らしく、国の防衛・安全保障について、欧米の政治家並みのしっかりとした政治理念を持つハードな論客政治家でもある。

自衛隊を辞め、松下政経塾に入り、裸一貫で、自衛官時代長期勤務したという関係の出身地でもない宮城で、一步一步、基盤を広げて、県知事となった。

政治的資質の高さは、並の政治家ではない。

村井氏の強さは、「当選したら我が事のように喜び、落選したら大変だと心配する、見返りを求めない」という志の高い多くのボランティアに支えられていることである。

宮城の防衛大同窓生は、村井知事の誕生が嬉しくて堪らず、今後の知事としての活躍と更なる飛躍・発展など、勝手に身内で語っているのが、近況である。

真のリーダーシップとは

志 方 俊 之（2期陸）

●不思議に思わないことが不思議なこと

幹事として防大に勤務したのは、昭和63年7月から平成2年3月までだ。想えば、防大の幹事は本当に難しいポストだった。三役と言われるが副校長でもない。他方、校長と副校長は自衛官ではないから、学生から見れば、幹事は自分達が目指す自衛官像の一番身近な存在である。副校長は、校長不在の場合の代行、すなわち「副」としての職務と、アカデミックな側面で校長を補佐する二つの職務がある。今はどうなっているか知らないが、当時の幹事には「副」としての職務や権限はなく、訓育の側面で校長を補佐する責任のみがあった。

今は誰も不思議に思わないことが不思議なことだが、防大の校長と副校長は、初代から自衛官ではない者であることが条件となっていた。もちろん、自衛官であることを途中で辞め、教授として防大に勤務していた者は、元自衛官であっても副校長に選ばれたことはある。

詳細に調べたことはないが、国軍の士官学校を持つ世界の国々で、制服を着た軍人であるが故に、その士官学校の校長になり得ない国は日本をおいて世界中おそらくないだろう。士官学校でなくても、一般大学でもその大学の卒業生であるが故に、その大学の校長になり得ない大学は世の中に存在するだろうか。

かつて国会議員をしているある先輩は、「その卒業生であるが故に、その監督者（長）になれないのは、刑務所くらいだ」と揶揄したことがある。防大を創設する

に当たって、吉田茂首相は、軍部が政治を抑え込んでしまった帝國陸海軍時代の苦い経験から、新しい自衛隊の将校を教育するのは、必ず文民としなければならないと考え、誰もがそれに頷いた。

しかし、自衛隊には政治優先という六十年間の実績があり、いまや防衛庁の省昇格や憲法改正が検討されるようになったことから、そろそろ防大校長の候補者の中に、幕僚長であった自衛官を含ませることを検討してもよいのではないか。もし、自衛官を校長にするのは未だ危険であると判断するのなら、六十年間の防大における文民優先の教育は、未だ定着していないと見られていることになる。

●防大教育が目指した幹部自衛官像

そんな幹事のポストについていたとき、経済の高度成長期は過ぎていたのだが、未だバブルが完全に崩壊していない時期だったので、卒業生の中から例年を上回る多数の任官辞退者が出た。この状況を重く見た防衛庁は、防大四年間の教育に何か見落としている欠陥があるのではないかと、その手始めに防大教育が目指す「幹部自衛官像」を再確認することとなった。

初代の榎智雄校長が示した「軍人である前に、健全な社会人に」をモットーに、防大教育が目指してきた幹部自衛官像は、一般大学のそれが目指す「知」・「情」・「意」・「気力」・「体力」とを備えた人間を創るという点では同じであった。強いて違いを挙げれば、「リーダーシップ」を育てるということだった。

一般大学の教育では、その卒業生を社会の構成員として「良き社会人」にすることが基本的な要件で、その内からとくにリーダーシップのある者は、政・官・財・学界など各界のリーダーとなり、その他の者はそれぞれに構成員として社会に貢献できればそれでよいわけだ。ところが、防大教育は、その卒業生全員を自衛隊の幹部とすることが要求されるため、何としてもリーダーシップを発揮して部隊を指揮・統率できる資質を持たせなければならない。自衛隊という武力集団の幹部を養成することは容易なことではないのだ。

顧みれば、防大の卒業生は、半世紀にわたってリーダーシップを発揮し、しっかりと自衛隊の精強性を維持して、わが国の持つ「抑止力」を実効あるものにしてきた。今はすでに多くの卒業生が退役して一般社会でも活躍するようになった。自衛官の定年は、一部の者を除けば一般社会に比較して十年ほど若い。一般社会なら、これから務めてきた企業やその他の企業の役員となって、それまでに築いてきた識見や人脈を使って、会社のために最後の活躍をする年齢だ。高齢化社会であればなおさらである。

筆者のように防大の創設期に入学した者は、どのような自衛隊を築いて行くか、当時はそれだけで頭が一杯だった。防大の卒業生が自衛隊を定年となって退役した後、どのような生き方をするのかなど考えたこともなかった。だが、今の防大生は違う。すでに多くの先輩が定年となって、どのように社会と繋がりをもって第二の人生を生きているか、その姿を見ている。自分達の行く末が見えているのだ。

●形を変えたフォロワーシップ

退役した先輩達の活躍は各方面で顕著なものがある国会議員、県会議員、市町村長もいる。NPOを立ち上げて海外での不発弾や地雷の処理、PKO部隊撤収後のアフターケアをしているグループも幾つかある。また、国内にあってはNRCBテロ対策に関するNPOも活動を開始した。全国各地で地方自治体の危機管理要員として活躍する者も多くなった。自衛隊のCPX手法を使って、政府機関や自治体における危機管理訓練を支援する会社もある。大学で教鞭を執る者、執筆活動をする者、安全保障関係のシンクタンクを造り活動するグループなど枚挙にいとまがない。

いま小原台で学ぶ防大生達に、われわれ先輩達が為し得ることは、国防という根源的な使命を務めあげ、さらに一般社会でリーダーシップを発揮して活動し、「それぞれの人生」の後姿を見せることであろう。しかし、「防大の卒業生が幹部として勤務する間に自衛隊で培ってきたリーダーシップは、一般社会で十二分に発揮されているか」と、自問自答するとき、否とする者が多い筈だ。我々が現役の間に発揮したリーダーシップは、実は形を「変えたフォロワーシップ」だったのではないか。「真のリーダーシップ」は、枠組の無い所に新しい仕事の領域を創りだし、自らが求心力をもって力を集め得ることではないのか。

およそ、軍人が肩で風を切って闊歩するような世の中は碌でもない世の中だ。防大の卒業生は、現役時代にはただ黙々と祖国防衛の任務を全うし、退官後は一般社会で真のリーダーシップを発揮して、大いに社会に貢献したいものだ。(了)

「二球会テニス」の活動状況

2期テニス世話役 加 茂 圭 一 (2期空)

生い立ち

自衛官を退職した後、平成3年秋に、防衛庁共済組合狛江スポーツセンターのテニスコートで、たまたま井川宏君(2期海)と会い、2期生のテニス愛好者で集まってテニスをやろうということになりました。当初、誰がテニスをやっているかが分からず、取り敢えず陸海空それぞれ捜して貰うということで、陸は河野和夫君(陸)、海は井川君、空は私が担当することにし、参加資格は、2期生とその夫人ということにしました。

現在、「二球会」として、次のような活動をしています。

1. 二球会テニス(狛江スポーツセンター)

第1回は、平成4年1月11日(土)、23名の方々に声をかけ、20名が参加されました。9時から15時までテニスをし、15時から16時まで反省会(懇親会)というスケジュールです。アフターテニスのビールは至福ですし、同期生が共通の趣味で話し合う、また、情報交換ということでも非常に楽しいものでした。年に1回か2回実施する積もりが、皆さんの強い希望で、もっとやろうという

ことになり、年5回実施することになり、平成17年11月には、69回目を迎えました。但し、その間、雨での中止が10回あります。会員数も、一時は38名まで増えましたが、その後、年のせいか、足、腕、腰等の負傷者が増え、参加者が20名を切るようになったので、1期のテニス担当だった堀田恵彦さん（1期空）にお願いし、平成9年5月から1期生にも参加して頂くことにしました。しかし、「二球会」という名称は、そのまま続けています。

2. 御殿場テニス合宿

防大同窓会テニス大会が、平成10年から始まりましたが、平成12年の時に、御殿場にお住まいの阿部順治さん（1期陸）から、御殿場の「国立中央青年の家」でテニス合宿をやらなにかとのお誘いを受けました。お話によると、もともとは青年の家なので、3月から9月は青年が使うが、その他の時なら空いていれば老人も受け入れてくれるとのこと、しかも2泊3日のテニス合宿、泊まって食事（全7食、バイキング形式）をしてテニスをやって、4千円弱とのことでしたので飛びつきました。第1回目は、平成12年10月に、23名（会員21名、夫人2名）の参加を得て実施しました。富士山を間近に見上げる場所なので、天気の良い日は、本当に気持ちの良いものです。また、泊江でのテニス会には、関東地方の方々しか参加できませんが、御殿場の場合は全国から参加者があり、遠方からは四国の真木和男さん（1期海）、越智富士夫君（2期海）が参加され、毎年20名前後が集まってテニスを楽しんでいます。スケジュールは、1日目の12時までに集合、昼食後テニス、夜は追加料理を頼んでの大宴会、2日目は一日かけて、3乃至4チームに分けてのチーム戦、夜は、またまた大宴会。3日目は、紅白戦で、昼食後解散です。生活は、防大での訓練が大変役に立ち、起床・朝礼・終礼・消灯があり、国旗掲揚・降下があり、各部屋は勿論、公共場所・便所・浴場の清掃が課せられます。しかし、ボール代、宴会費、賞品代、通信費等を含めて、会費が1万円ですから文句は言えません。

朝礼では、国旗掲揚、ラジオ体操、参加各団体の自己紹介が実施されますが、今まで「二球会」よりも年取った団体の参加は見当たりませんでした。

また、最終日の朝、チェックアウトで、部屋の清掃、ベッドの整頓、洗面所、便所の点検を受けるのですが、「このように完全にやって頂ける団体はありません」との評価を受けています。

去年は、第6回目で、10月10日から12日まで、男性の



み20名が参加しました。しかし、体力の衰えは如何ともし難く、何とか10回目まではやろうと言うことで張り切っていますが、2期生も、去年は古希を迎えましたので、何時まで続けられるか心配です。にも関わらず、皆さん元気で、懇親会后、外に出る方が結構います。飲むこととカラオケですが、門限がありますから、それまでに帰ってくるをお願いしています。今のところ、皆さん、23時の門限を切ることはありませんが、元気なのは呆れる程です。

3. 同窓会テニス

平成10年から同窓会テニス大会が始まりましたが、他の期が団体戦の選手10名を集めるが大変だと言っていたが、2期は選手を選ぶのに苦労した程でした。また、優勝は、平成13年と14年のシニアでの団体優勝、及び平成16年と17年のグランド・シニアでの個人戦での優勝を果たしています。

結び

このように「二球会テニス」は、活躍していますが、何時まで続くかが問題です。70歳（古希）を過ぎると、色々と痛いところ、故障が出てきます。しかし、何とか一年でも長くテニスを続けて楽しい人生を送ろうと考えています。

なお、この場をお借りして、全国の1、2期生で、テニスを続けておられる方からの連絡をお待ちしています。

ブータンから

堀川正照（4期陸）

私はJSV（財団法人日本シルバーボランティアズ）というNGOのボランティア団体から派遣され、平成17年6月から1年間の予定でブータン王国の自然保護協会（Royal Society for Protection of Nature）でボランティア活動をしています。活動の内容は「情報工学専門家」としての業務で具体的には、ホームページの作成、データベースの構築、ネットワークの管理などのお手伝いです。

ブータンは行ってみたい国の一つでしたが、旅行者としてではなく生活者としてこの国を見聞できるとは思っていませんでした。このような機会が得られたことをたいへん喜んでいます。以下、見聞からいくつかを・・・

・言葉

ブータンは小さな国だが地方により使われている言葉が異なり、約20種類あるという。共通語としてブータンの一地方語である「ゾンカ」と「英語」を学校で教える。しかし他の科目の教科書が英語で書かれている、新聞、テレビ、インターネットでの英語の実用性などから英語の比重ははるかに高い。

首都で週2回発行されている新聞はゾンカ、ネパール語、英語の3ヶ国語で印刷され、英語の部数が一番多い。ラジオは4種類、テレビは2種類の言葉で、時間をずら

して同じ番組を放送。

ティンブー（首都）の普通の大人は、ゾンカ、英語、ファミリーの出身地方の言葉、ネパール語、ヒンディ（インドの共通語）がしゃべれる。会話はまずゾンカで始まり、お互いが話しやすい言葉へと移る。その変化は見事。

・服装

男は「ゴ」、女は「キラ」が法律で定められた民族衣装で、公式の場所では必ずこれを着用しなければならない。小学生の制服も「ゴ」と「キラ」。

国技である弓術競技の見物席は公式の場で、皮のコートを着ていたブータン人が警官に注意されていた。注意をする、しないは警官の主観によるものらしく、同行のブータン人は「彼が一番うるさい」。

「ゴ」は和服と同じように前で合わせて帯を締める。裾を膝の高さに揃え、後ろのひだをきれいにさせるように着るにはかなりの熟練が必要。膝まである長いソックスをはくが冬は寒い。椅子に座ると女性のミニ・スカート状態になり人の目が気になる。

私も2着揃えた。「ゴ」で街を歩くとゾンカやネパール語で話しかけられる。それほど日本人とブータン人は似ている。

・お酒

「アラ」という米・雑穀から造る地酒がある。蒸留酒で香りもアルコール度も焼酎に近く、ティンブーでもかなりの家庭が造る。

蒸留と聞くと大げさな装置を想像するが、お釜を2つ重ねて上に水、下に発酵させた雑穀酒を入れてかまどで熱するだけ。上の釜の底で冷やされたアルコールが液化し、滴り落ちるのを別の容器で受けて出来上がり。

当局も「アラ」に対する酒税の賦課を免除しており、隣家で造ったからとウイスキーやコーラの空き瓶に詰めたものをたびたび貰う。自家用がたてまえだが製造元から購入もでき、値段は1リットル50～60円。ちなみにインドから輸入された瓶ビールは酒屋で75円。

東部の田舎では「アラ」をお茶代わりに飲み、農作業にも必携。昼間から、一杯引っ掛けながら仕事ができる桃源郷。「飲んで運転している者もいるから気をつけろ」とは知り合いの警察官からの忠告。

・国王も助手席

ティンブー市内を車で走行中、畏れ多くも「国王陛下」の御料車（トヨタの四駆）に遭遇。本来なら車を路側に寄せてエンジンを止め、眼が合わないよう面を伏せて行き過ぎるのを待たねばならない。

前後をはさむ警備車もサイレンを鳴らすでもなくごく普通に走行。御料車のナンバープレートには「BHUTAN」



ブータンの礼装(ゴ)を着た筆者

としかなく、こんなナンバーもあるのかといぶかしんでふと助手席を見ると写真でおなじみの「国王陛下」。

たいへん不敬なことをいたしました。

お住まい（宮殿）は遠くから拝見したところ田舎風の質素な造りで、役所にある執務室も机と椅子のほか余分な装飾はないという。何事も国民第一にお考えになるので全国民の等しく敬愛する国王。

昭和天皇の「大喪の礼」と90年の「即位の礼」に「ゴ」を着用して来日されている。

（注：ブータンでは助手席が最上位の席とされている。）

海外でのボランティア活動は2度目です。先回はJICAから派遣されて97年10月から1年半、ヨルダンの王立航空アカデミーでシステム・エンジニアとして活動しました。

今回も赴任国を正しく理解するとともに日本の姿を正しく伝え、両国の友好親善に役立ちたいと思っています。（10月下旬記）

Mail Address: masthr25@yahoo.co.jp

PS. ブータンの事情に興味をお持ちの方は次のサイトをご覧ください。

私の見聞と写真がアップしてあります。

<http://shakuhachi.ddo.jp/~horikawa/bhutan/>



僧侶の演じるダンス

サロマ湖100km ウルトラマラソン完走記

中 村 曉（7期陸）

学生時代は陸上競技部に籍をおいた。当時は箱根駅伝を目指していたので半ば強制的に長距離を走らされていた。そのお陰で、昭和35年、37年の2度にわたり箱根駅伝に参加することができた。その後、初級幹部時代を除いて殆ど走っていなかったが、退職前から健康管理のために少しずつランニングを始めていた。9年前になるが、退職して長い間の単身赴任から開放され、これから地元はどう溶け込んでいくのか戸惑っていた。偶然、近く先輩からランニングクラブに入らないかと声をかけられ、地元の浦安ランナーズクラブ（千葉県浦安市）に入会した。今では多彩な仲間と共に充実した生活を送らせて貰っている。

クラブ仲間と共に走り込んで、フルマラソンを完走できるようになると、更にウルトラマラソンや山岳持久走

など過酷なレースを目指している人が羨ましくなった。自分も100kmマラソンに挑戦しようと思ったのは、2003年6月、浦安から箱根湯本まで約100km、箱根駅伝のコースを一人で走るというクラブ仲間のイベントの時であった。70km地点の茅ヶ崎でエイド支援していると、仲間が次々と懸命に駆け込んでくるその姿を見て大きな感動を覚えたからであった。

国内で初めて100kmマラソンが実施されたのが、サロマ湖100kmウルトラマラソンで、2004年は19回目の大会であった。オホーツク海に面した素晴らしい景観の中を走るサロマの大会で初完走を目指した。春になり4月230km、5月460kmと走り込み、これでなんとかなるだろうと安易な気持ちで、仲間と共に6月末のサロマ湖に向かった。スタートして42kmの関門は順調に通過できたが、67km付近で両脚がガチガチに痙攣して動かなくなりレースを断念、収容車に乗る羽目になった。自分のトレーニングの甘さを痛感し、悔しい思いだけが残った。これを吹っ切ろうと、夏から秋にかけて走り込み、11月末の「つくばマラソン」に出場した。サロマの失敗で発奮できたのか、3時間28分30秒の自己新を達成することができた。クラブ最長老の83歳の先輩が「君、フルを3時間30分で走れなくて、100km走るのはおこがましいよ。」と激励を受けていたこともあって、気持ちが随分楽になった。

年が明けて2005年1月9日、クラブ10周年を記念して、姉妹都市オーランド市のウォルト・ディズニーマラソンに参加した。ディズニー・ワールドの各テーマパークを巡るコースで42kmを楽しんだ。次いで1月30日に勝田全国マラソンを走った。風が強く寒くて3時間52分、やっとのゴールであった。

これらを含めて1月は約170km、2月約180km、3月約210kmと昨年よりは走り込んだ。気候が良くなるにつれて、サロマに向けて走り込まなければとの思いが強くなった。4月17日のかすみがうらマラソンは3時間35分で、なんとか3時間30分台をキープできた。4月25日、クラブ仲間4人で高尾山口から高尾山(△599m)を経て陣場山(△857m)まで往復30kmを走った。2リットルの水とオニギリを背負ってアップダウンの細い登山道をベテランの後についていくのは大変だった。5月の連休間、市内の海浜公園で5時間、50kmを目標に走り、次いで浦安から江戸川沿いに寅さんの葛飾柴又まで往復40kmを走った。5月22日、サロマの仕上げとして、東京ディズニーランド外周沿いのコースで6時間、60kmを走った。この間、4月約320km、5月約460km、6月は26日のレースまで240kmと約1,000km走り込んだが、レース当日まで不安が残った。

今年は20回の記念大会で、約2,800名がエントリーした。半数以上が道外からの参加者で常連が多かった。レース前日(25日)は21時には就寝したが、当日(26日)は午前1時起床、殆ど眠れなかった。2時から朝食、4時頃に会場着、夜が明けてきた5時に6名のクラブ仲間と共に興奮気味にスタートした。今年のサロマも去年と同様快晴で朝から暑くなった。給水、塩分の補給に気をつけ、20km付近から塩を摂り始めた。42kmの関門を過ぎて、10時頃から気温が上がり、路面からの照り返しがあって体感では28度位になった。給水所で頭から氷水をかけてもらい、両足を冷やし、頭に氷を載せて帽子を被って走

った。5km毎に時計を見ながら6分/kmの維持に努めたが、5km毎のエイド、その中間にある給水所で立ち止まるので常に遅れ気味であった。

中間の55kmのエイドは軽食、着替え等大休止の場所であったが、お握り2個食べただけで先を急いだ。昨年と同じく、今回も70km関門の手前で両太ももが攣った。エイドで15分程立ち止まって、ストレッチをして氷の塊をもらって両脚を冷やしたが回復しそうになかった。覚悟を決めて、とにかく行けるところまで行こうと思い、脚が攣る度に消炎スプレーをして痛い足を引きずりながら走った。今年もまただめかと、あわや断念するところであった。ウルトラマラソンでは一度は地獄を見ると言われている。ここが正念場であった。75kmを過ぎてサロマ湖の原生花園に近づき少し元気が出てきた。80kmの関門で3時間25分位の余裕があったので完走出来そうな気がしてきた。しかし、原生花園に入ってから10kmの折り返しは小さな起伏の連続で、長くて厳しかった。景観を楽しむ余裕など全くなかった。地元で応援している仲間の顔が浮かび、ここで挫折しては面目なくて帰れないと必死の思いでゴールをめざした。制限時間13時間のところ12時間32分で何とか間に合った。

今年の出場者は2,645名で、完走者は1,807名(完走率68%)であった。ちなみに、私の該当する男子65歳以上では94名の内完走者は49名で、最年長は74歳であった。100kmマラソンは走力と気力の両方が揃わなければ達成できないことをしみじみ実感した。お陰で苦労しただけの喜びと一緒に走った仲間と十分味あうことができ、サロマ湖の100kmは自分にとって一年間のドラマになった。現在100名を超えるクラブの年長組であるが、若い仲間(30～50代)と共に今年も夏場から秋のつくばマラソン、来年夏のサロマを目指して楽しくトレーニングしている。

サロマをはじめ各地の大会に参加するたびに、地元の部隊が大会支援に活躍している姿をみて感謝すると共に、自衛官が地元レースに多数参加しているのに元気づけられている。

同窓生各位が活躍中の「水交会」

平井良彦(13期海)

財団法人「水交会」が昭和29年に認可されてから、今年で51年になります。当時、海軍出身者で占められていました同会は、現在では海上自衛隊出身者が大勢を占めるようになり、その中で防衛大学校同窓生が多数活躍しております。この稿では、水交会全般と、平成16年に新設されました研究委員会の活動状況を紹介して、その中から同窓生各位の活躍振りを汲み取って頂ければ幸甚に存じます。



水交会玄関(渋谷区神宮前)

「水交会」の目的は、旧海軍の勤務に関連して戦傷病者戦没者遺族等になられた方の援護及び戦没者等の慰霊顕彰並びに海上自衛隊殉職隊員の慰霊等海上自衛隊に対する必要な協力を行うとともに、旧海軍のよき伝統精神を継承しつつ、会員相互の啓発、扶助及び親睦を図り、もって国の福祉と平和に寄与することです。この目的を達成するために、①旧海軍の史実及び海洋問題の研究及び資料の収集整理、②国内外の友好団体との交流、親睦、③機関誌、参考資料及び図書等の刊行、④集会設備の設置及び運営、⑤戦没者の遺族等に対する援護及び戦没者等の慰霊顕彰、⑥海上自衛隊殉職隊員の慰霊等々の事業を行うこととしております。そして、当然のことながら、会長以下、諸役員等が置かれております。この役員等の他に、前述しました事業を行うに際し、その業務を円滑に遂行するために、会務・財務委員会、クラブ委員会、編集委員会、支援・支部・会勢拡充委員会、研究委員会があります。これらの役員等、また、委員会の委員として、防衛大学校同窓生が、ボランティア精神を大いに発揮して活躍している訳であります。これらの中から、筆者が属しております研究委員会の、これまでの2年間の活動状況を簡単に紹介します。

「水交会」の事業の一番目に掲げられております「旧海軍の史実及び海洋問題の研究及び資料の収集整理」に關しまして、機関誌「水交」が発足当初から継続して発行されていますが、これだけでは研究及び資料の収集整理が体系的になされているとは認めがたいという反省に立ちまして、研究活動を充実させることの必要性が指摘され、平成16年1月に「研究委員会準備プロジェクトチーム」が立ち上げられ、その検討成果をもちまして、平成16年4月に「研究委員会」が新設されました。そして、研究等活動の指標を、後世に残すあるいは伝えること、広く普及啓蒙すること、現職隊員との交流の場を設けること、水交会の精神性を高めることに置きまして、資料、図書の収集整理、特定研究、論文公募等、現役との討論会の開催、講演会の開催、本の刊行等の事業を行うことになりました。これらのプロジェクト作業及び各事業の中で、防大1期生他、同窓生各位が大いに活躍していることは言うまでもありません。平成16、17年には、旧海軍関係者からの戦場体験の教訓の収集や、「水交会」所有蔵書の整理、機関誌「水交記事」リストのホームページ公開、現役幹部との討論会、定例講演会等を行ってきたところであります。これまでの活動を通じて感じますことは、同窓生として先・後輩の関係、役職は尊重しながらも、研究委員としては対等で、丁々発止と議論ができる雰囲気があり、温かく、素晴らしく、かつ、建設的な同窓の絆に感銘を受けていることでもあります。また、わが国の安全保障のあり方を広く国民に普及すること等課題は多く、なすべきことは多々ありますが、継続して活動することが大切で、一步一步前進し、積み重ねて行くことが大切であるということでもあります。このような雰囲気の中、月1回の定例会と日々の活動を行っております。同窓生諸兄で、水交会活動に加わり、役に立ちたいとお考えの方は、是非水交会事務局へ申し出で貰いたいと思います。

末筆ながら、研究委員会には、現在、防大4、7、9、12、13、14期生の同窓生数名が属しており、また、水交

会の役員等、他の委員として、また地方支部の役員等として活躍しておられる同窓会諸兄も多数おられますことも併せて報告してこの稿を終わりたいと思います。全国各地の同窓生各位のますますのご健勝、ご多幸を祈念致します。

「水交会」ホームページ

<http://homepage3.nifty.com/suikoukai/>

カッター訓練 (神戸大会、大阪大会に出場)

盛 田 節 生 (13期空)

今頃、カッター訓練とは何の話だと思いでしょが、もう7年ほど前から春になれば7月の大会が終わる迄は毎週、旧神戸商船大学ポンドで汗を流しています。先輩・後輩にとらわれず面識が無いのに気楽に声を掛けられるところが防大の良さであることは皆様をご存知でしょう。さもありなんで、“カッター大会に出るから艇員を集めようか”と21期生に声を掛けたところ、“この先輩は何を考えているのか”と言う目つきで見られましたが、今は31期生と共に率先して“関西小原台短艇委員会”を引っ張ってくれています。

使用艇は6人漕ぎ、艇指揮と艇長合わせて定員8名、長さは6メートルです。櫓は鉛を入れず、9メートル艇よりやや軽い程度です。櫓座は取り外し可で、回転し、櫓を外しやすく、力を入れ過ぎると後ろにひっくり返ることもあります。また、艇員の前後間隔がやや狭く、足の長い人は少し窮屈に感じます。艇の素材は9メートル艇を含め全てファイバー製9メートル艇では櫓もファイバー製もある)です。現在の走水ポンドでは如何様になっているのでしょうか。

8年前、カッター大会なるものあることを知ったのは、私が所属していた「大阪帆船友の会」の女子部が大阪市主催カッター大会に初出場、その応援に駆けつけた時です。惨敗でしたが鍛えればいい線まで行けるとの思いで、来年もぜひ出場しないかと促し、練習中コーチをすると申し出て指導することになりました。彼女達はずっとボートを漕いでいたこともあり、すぐに艇と櫓に慣れ、



女子部との合同写真



大阪大会予選終了後

指導も楽しかったのですが、当然のことながら、私自身大会に出て漕いだ方がよほどおもしろいだろうと気付くのに時間はかからず、後輩達に声を掛けた次第です。私やその後輩の呼び掛けに“カッターですか？”と低いトーンで返ってくることがありましたが、結局、私より体力のある者が集まり過ぎて私自身は漕がしてもらえずに世話係や艇指揮として頑張っています。年にもよるのですが今まで関西勤務の現役も良く出てくれました。

思い返せば訓練初日、大阪府南端にある淡輪青少年海洋センターでの初対面の後輩達のすがすがしい顔を思い出します。カッターへの懐かしさ、どの程度漕げるかなという計り、櫂を久し振りに握った時の感触は、嘗ての小原台の青春がよぎったことでしょう。

当初は号令を思い出しながらの艇指揮なので甚だ頼りないのですが、お互い面白さが先に立ち、また後輩達も如何に漕いだかを思い出そうとしながらの苦笑いで始まりでした。筋肉が萎縮して2回目の訓練が終わるまではしんどいのですが、さすが学生時代の「良き訓練」のお陰で勘をとり戻すのは早く、まもなく櫂の漕ぎ方・回頭方法などを検討し始めます。

2年前までは5時間、大学が独立法人の影響を受けて現在は3時間の練習は真面目なものです。が、たまには女子部との合同練習の上、若くはありませんから先ず怪我・熱中症に気をつけ、しんどくなったら遠慮無く休息できるので気は楽なものです。そう言えば訓練を始めた頃、海上にて“初めての子が生まれた”との連絡を艇員の33期生が受け、共に喜んだこともありました。

問題は初出場で大阪大会第1レースに負けたこと、一緒に練習し指導してきた女子部は決勝まで進出したこと、爾来この状態が3年ほど続いたことです。レース中の主催者講評で当方チームの漕ぎ方のきれいなのは褒めてくれるのですが結果はさっぱりでした。

大阪大会と次の年から出場し始めた神戸の両大会ともに、レースは約500メートル、3チーム毎の勝抜戦で、男子は40を超えるチーム、女子は約10チームが出場し、毎年良くて2回戦迄で大抵1回戦で敗退していました。他のチームには神戸商船大や海技高等学校で4年間漕いでいた強力な相手がいるのでレベルは高く、くじ運が良ければ勝てるのですが、それ以外はダメだったのです。名前を「関西小原台倶楽部」チームなんてことにしておいたのは先見の明ありと思ったほどです。

6年前から、関西の同窓会「関西小原台倶楽部」が「防衛大学校同窓会関西支部」となり、先輩や防大父兄会の

皆様が応援に来られる様になった上、同窓会から大きな応援旗まで頂くことになり、負けた後のビールがうまい筈がなく、試合は勿論練習も楽しむには勝たなくてはならないと思うようになったのは私だけではありません。

ところで、距離が短い分回頭要領が重要で艇指揮・艇長の責任は重いのですが、私自身、今まで特段の工夫も無く、艇の特性を省みず、艇指揮としてただ声を張り上げていただけで満足していた感があります。その私を一変させてくれたのは一昨年から同期の元海上要員が漕ぎ手として加わったお陰です。彼は嘗てボート部に所属し、現在も家にボート練習台を置いて体力を維持しているほどで、後輩達に伍して今も強力な戦力となっています。その彼が練習中、私の艇指揮技術の欠点を厳しく指摘してくるのです。遠慮の無いのが同期の良さで、練習中後輩が艇指揮をしている時はやさしいのに、私の時は容赦ないのです。お陰様で私の艇指揮としての腕は上がりました。

後輩達は、今まで気付いていても私に遠慮して指摘してこなかったのかも知れませんが、同様なことは、私自身カッター以外の同窓会活動でも心しなければならぬと思う次第です。

艇員については、今年は実力が一変しました。元短艇委員会28期生の“6人漕ぎの軽い艇では、深く寝ないで手漕ぎ・早漕ぎが効率的”との当を得たアドバイスを素直に聞き、両大会に分けて彼や41・43・44期生の自衛隊現役との混成チームでの出場が功を奏しました。1分間のピッチを24から32枚にしても寝ていないので、ロートルでも体力を維持でき、今までの様に回頭後もへばらず、実力で準決勝まで進出し、2回目のグッド・シーマンシップ賞も受賞しました。

そして、主催者から「関西小原台倶楽部」とは何者だとの質問が初めてあり、防衛大学校出身者だと答えたところ、“なるほど、道理で堂々とした態度だ”と知れ渡りましたので、今後はその期待を裏切らない姿勢で臨まねばなりません。ただ、我が「関西小原台倶楽部」チームは平均年齢が高く、決勝戦に出るような20代の相手チームには体力的に負けますので、今後、その壁をも破ろうとするのか、あるいはレースを楽しむ程度にするのか、と悩むことになりそうです。

大会当日は7期生の支部長をはじめ、後輩たちへの昼弁当をご持参の3期生ご夫妻や1期生を含めたOB、走水会（防大父兄OB会）の皆様の温かい声援を頂いております。

勝てば楽しき1日となります。午前中の1回戦に負け



手前から2艇目が小原台倶楽部艇

れば……又来年があります。

最後になりますが、関西に来られたら“懐かしの Cutter”を漕がせてあげますから、関西防大同窓会事務局にちょっと立ち寄ってみてください。

関西防大同窓会ホームページ・アドレスは
<http://www.kcat.zaq.ne.jp/kazu-n/>

リスクコンサルタント —アフガニスタン勤務

大隈末雄（13期陸）

私の肩書きは富士総合株式会社海外事業本部長、海外リスクコンサルタントを兼務している。退官後2002年9月から昨年の4月まで、在アフガニスタンJICAの安全担当専門員として通算1年間勤務した。昨年11月からはアフガニスタンのKH（カンダハール～ヘラート）幹線道路工事業者の安全担当として、本社で本部長業務の傍ら東京とカンダハールを往復する生活である。

アフガニスタンは1979年に旧ソ連の侵攻を受けて以来23年間、国土が戦火にみまわれ荒廃し尽くしたにも拘わらず、現在もなお日常的にテロの脅威にさらされている国である。9.11テロの後、アメリカによるタリバン制圧を経て2001年12月の国連ボン合意を受け、現在まで曲がりなりにも復興のスケジュールをこなしてきたが、民族、部族、宗派、利権等々による対立が治安状況に深刻な影響を与えているのが現状である。

アフガニスタンは、国土こそ日本の1.7倍の広さを有しているが、ヒンドクシ山脈が国土の大半を占め、首都カブールも標高1,800mの高さにある。平地部分は北部と南部、南西部に見ることができるが、一面に土漠が広がり、僅かにツチ族が遊牧を営んでいるにすぎない。かつては緑滴る地であったところも、長年の旱魃と戦禍による灌漑システムの破壊により水を得る事が出来ず、荒れ果てている。更に対ソ戦から内戦時代を通じて全土に埋設された地雷が700万から1,000万個にも上るといわれており、農業の実施そのものを困難にしている。

電気、水、道路、燃料、通信等々のインフラが大きく破壊されている上、教育、衛生、各種技術等のレベルも低く、気候の厳しさと相俟って生活環境は極めて厳しいと言わざるを得ない。

民族は20種類とも言われているが、パシュトゥン、タジク、ウズベクそれにハザラの4民族が主体を成しており、それぞれは長い歴史の中で相克と共存を繰り返して来た。内陸国ゆえの必然として周辺国の影響も強く受けざるを得ず、大国の覇権の舞台ともなってきた。アフガンが征服者のハイウエイとも呼ばれている所以でもある。ギリシャ、ペルシャ更に仏教文化の影響を受けた地に7世紀にはイスラムの浸透、12世紀にはモンゴルの嵐にも似た席捲を受けた歴史を背景として、今日のアフガニスタンがある。国家の復興を左右する大きな要素の一つは、やはりイスラム教であろう。イスラムの教義と近代社会



KH道路と一面の土漠

を成り立たせてきた自由・民主・平等、その結果としての資本主義とは融合が可能とは思えない。これはアフガニスタンのみならず、イスラム社会、ひいては世界の問題ともいえるのだが――。

アフガニスタン人と直接接していると、その素朴さ、礼儀正しさに心とむい思いをすることがあるが、国土・気候・イスラムの文化等が原因なのか、彼らには基本的にプロダクトが無い。関心が有るのはディストリビュートのみであり、これには大変に執着するといった傾向がある。従って、トレーダーとしては天才的とも言える商才を持っている。横行する麻薬・密貿易・私的関税の徴収等は取り締まりの強化という次元で解決出来る問題ではないと思わざるを得ない。

現在、2005年9月18日に実施された議会議員選挙が今後の治安状況に如何なる影響を与えるのかに国際社会の関心が集中している。議会議員選挙はボン復興プロセスの最終段階に位置付けられたものであり、選挙の実施そのものを否定してきたイスラム過激派勢力のテロ活動は6月以降急激に激しさを増してきた。彼らは今後如何なる行動を採るのか、また群小の軍閥が議員というオフィシャルな肩書きを得て、民族・部族・宗派を背景とした利権闘争をますます激化させるのか等々、読み切れないもどかしさを痛感している。10月末には選挙結果が明らかになり下院・州議会議員が確定する。権力闘争の新たな配役が表部隊に登場することになるわけである。

愛着と嫌悪・困惑との相俟った気持ちでアフガンをウオッチしている。明日23日、4度目のアフガン入りを予定している。

（2005年9月22日記）



遠隔操作爆弾の爆破被害

支部だより

北海道地域支部

防大同窓会北海道地域支部事務局

1 平成17年度総会及び懇親会

同窓会北海道地域支部では、平成17年4月16日、札幌市内ホテルにおいて、「防衛大学校同窓会北海道地域支部平成17年度総会並びに懇親会」を実施しました。

会場には、第1期生から第48期生までの115名が出席して行われました。席上、工藤義弘支部長から御挨拶があり、「会員皆様からの強い要望もあり、同窓会北海道地域支部として平成17年度の総会並びに懇親会を実施する運びとなりました。この機会に会員皆様相互の親睦を深めて頂きますとともに、これからも同窓会北海道地域支部として毎年度の事業を計画的に推進しながら母校の充実・発展に寄与して参りたいと考えております。」と、会員皆様相互の親睦と地域支部事業への御理解・御協力を伝えられました。その後、懇親に移り、和気藹々と会員相互の親交と絆を深めていました。最後には、全員が輪になり追憶歌の合唱で締めくくり、たいへんに有意義な懇親会になりました。

2 地域支部行事

また、支部では、毎年の事業である北海道出身の防衛大学校新入生に対する激励品の贈呈を、本稿の協力を得て、今年度新入生28名に対して本校で行いました。(写真参照) 贈呈者は、9期生の吉田正義氏(北海道地域支部理事)にお願い致しました。吉田氏には、平成17年5月17日、本校に赴いて頂き、北海道からの入校者28名に、一人ずつ激励品として「各個人のネーム入りボールペン・シャープペンシルセット」を贈呈して頂きました。この際、吉田理事から「御入校おめでとうございます。同窓会北海道地域支部会員一同、皆様の御入校を心からお祝い申し上げ、またこれからの勉学への御精進と皆様の御発展を祈念しております。」と述べられ、学生全員と記念撮影を行いました。

3 今後の活動

北海道地域支部は、退職会員と現職会員とを合わせて約1,000名の会員で構成しております。毎年の事業については、年度の理事会及び代議員会により承認を受けて実施しています。今後とも同窓会本部との連携を図りながら年度事業計画を計画的に実施して、会員相互の親睦と母校の発展に寄与して参りたいと思っております。



北陸支部の活動状況

平成17年3月26日、役員会を開催し、ボランティアへの協力支援・総会の開催要領を討議しました。

ボランティア(竹林整備)への協力支援については、3月の時点で同窓会本部からの依頼もなく、日本財団からの連絡もなく、また、現地の運営団体からも何の連絡もなかったため、支部として会員への連絡・参加者のとりまとめ等の対応が困難であり、今年度は北陸支部としての支援は、実施しないことといたしました。

平成17年8月13日、第4回総会を開催いたしました。今年度は、現役の学生や学生の父兄も講演会・懇親会に参加してもらってはどうかとの意見もあり、お盆の時期に設定いたしました。実際には現役の学生の参加はありませんでしたが、学生の父兄5名の参加がありました。講演会の講師は、本庄金沢駐屯地司令にお願ひし、貴重な体験談を拝聴いたしました。懇親会も例年どおり、学生歌斉唱からはじまり、追憶歌斉唱に終わるパターンですが、現役自衛官15名、OB15名、来賓6等名の参加により、和気藹々と歓談もはずみ有意義な懇親会となりました。

関西地域支部(呼称・関西防大同窓会)

会長 中 一皓(空7期)

関西地域支部は創立から6年が過ぎ、その活動内容もより広く、より深く、これからも変身して行くことが楽しみな会となりました。幹事会では活発に意見が交換される上、「ええんじゃないの」というおおらかな雰囲気なので企画の提案がやり易く、又、実行時には発案者が責任者となり、無理じいしないところに親しみが持てます。

関西小原台倶楽部時代からの主要活動を引き継ぎ、活動内容も充実しています。過去一年間の活動内容はホームページ(<http://www.kcat.zaq.ne.jp/kazu-n/>)でご覧いただけますが、概略は下記の通りです。

カッター大会出場

毎年、5月に神戸港、7月に大阪港で伝統あるカッター大会が催されます。いずれも40チームを超える参加で盛大な大会です。「関西小原台倶楽部」チームが参加し始めて7年、当初の「参加する事に意義がある」から、「勝たなければ面白くない」に意識が変わりつつあります。

関連記事が同窓生アラカルトに「カッター訓練」13期航空盛田節生 に記載されています。併せてご覧下さい。

古刹探訪（京都のお寺の見学と京料理を楽しむ）

隔年で京都五山のひとつ「東福寺」にて紅葉の季節に、座禅と京料理を楽しみます。遠くは北海道・東京・名古屋からも有志が参加されることもます。

昨秋は、本堂「御影堂（ごえいどう）」が平成の大修復中の「西本願寺」を見学いたしました。いずれも、特別なご配慮を得て、通常では見学が叶わない貴重な施設や文化財の拝観を楽しみました。



歴史探訪（関西一円の歴史を散策しながら学ぶ）

関西は国宝や文化財の宝庫です。ハイキングを楽しみながら、由来ある所を散策します。費用も交通費と昼食代だけですから手軽な上、現在の幹事役8期生ご夫妻の事前準備よろしく、研究された資料を眺めながら案内者の後をぞろぞろ付いて行くだけで、気楽で、楽しい一日となります。

昨年のNHK大河ドラマ「新撰組」に引き続き、今年は「義経」を題材に2度行ないました。一回目は「京都における義経の足跡」で、義経の京都でのゆかりの地を訪れ、二回目は「一ノ谷・鶴越の逆落し」を須磨の現地に訪れ体感しました。

この元戦史教官の名幹事役は、来年には郷里の熊本に帰られるとのこと、後任の世話係りを誰がやるのが来年の課題です。前任者がしっかりやられると後が大変なのは何処も一緒のようです。



講演会（同窓生を講師とした勉強会）

今年は「髭の隊長」こと佐藤1佐の講演でした。参加の部外者からはマスコミ報道では全く伝わってこないイラクでの自衛隊活動の実情が良く理解できました。広く一般市民にも是非聞かせたい素晴らしい講演でした、と絶賛されました。



講演終了後は、講師も含めて食事を楽しみながら必ず打ち上げ懇親会があるのも、これ又楽しみです。

ゴルフ大会（春と秋）

今春は2期生が支配人をされているカントリークラブでお世話になり、初めて1泊2日のゴルフ大会が実現しました。送迎バス、宿泊、食事、プレー費、等々すべて含めて破格料金設定でした。最後のラウンドで雨に祟られなければ、云う事なしだったのですが、すべてが思い通りにはなりません。

テニス大会（1泊2日）

同窓会事務局長の趣味で世話役を率先して始まったテニスはいつも1泊2日で、テニスをしない家族のためにはプール、ジャグジー、サウナ、そして新緑の清涼しい空気の中を早朝散策ができる施設を設定しています。

総会・講演会・懇親会（2月の土曜日）

総会出席者はOBが例年100名程度です。創立当初は現役会員も多数出席してくれたのですが、近頃は、公務多忙のためか減少傾向にあります。

講演会には、中谷 元防衛庁長官を講師にお招きして「昨今の国際情勢と自衛隊」と題して、有意義なお話をいただきました。防大大阪父兄会、走水会（父兄会OB）に声を掛けるところ、多数の参加を得て、盛大な総会となりました。



これからの同窓会活動

只今、検討中なのは文化活動（趣味）の同好会の発足です。何を、何処で、且つ安価に活動できる内容を模索中です。現在、関西は他地区・地域の同窓会よりも充実していると思われていますが、これがうまく行けば関西防大同窓会はより楽しい会になるでしょう。つまり輪が広がるということです。大体の構想はあり、同窓会の枠を超えての活動になるかも知れませんが、軸足さえしっかりしておれば、それも又良しでしょう。現役の皆様も参加してくれましたらうれしいですね。

第2の人生は短い様で結構長いものです。現役の皆様は平素から生涯楽しめる何かをひとつ見つけておいて下さい。

イラク派遣部隊への支援

最後に、昨年度の報告で、イラク派遣部隊がいよいよ地元関西から派遣される日が近づいてきた旨、記載いたしました。

皆さんご存知の通り、本年度は中部方面隊隷下から、イラク人道復興支援部隊が灼熱の地イラクに派遣されました。我々OB会としても何かできることはないかと考えていましたところ、大阪防衛協会を中心として、関西所在の自衛隊支援団体が協力して、支援活動が展開されました。早速、同窓生諸兄にご協力をお願いいたしましたところ、予想を倍すご支援



をいただきました。特記すべきは、普段は同窓会活動に参加されておられない諸兄からも暖かいご支援をいただきましたことです。さすがは防大同窓生と意を強くした次第です。

また、昨年12月には、先発のイラク復興業務支援隊第3次要員の出発に先立ち、大阪のホテルで派遣隊員の健闘と無事の帰還を願って、盛大に歓送会が催しました。

本隊は第十師団を基幹とする第5次イラク復興支援群が2月～5月、地元関西は第三師団を基幹とする第6次イラク復興支援群が5月～8月に、それぞれイラクで支援活動を実施されました。そして、全隊員が無事に帰還されましたことは、この上ない喜びでありました。

帰国歓迎会では、任務を達成した隊員諸君の真っ黒に日焼けされた精悍で、自信に漲った顔つきが印象的でした。

10月2日に中部方面総監部で、総隊45周年記念行事が催されました。その栄えある席で中部方面総監より、関西防大同窓会に「感謝状」と「記念の盾」を賜りましたことを付記しておきます。

なお、関西地域支部では、同窓会本部の意向に則り、役員の若返りを図るために次期総会（平成18年2月4日）で、会長をはじめ主要役員の交代を行なう予定です。

岡山地区支部

事務局担当幹事 永岑 富彦（陸10期）

今年は、『晴れの国 岡山国体』が開催され、県下活気を呈しました。

さて、岡山地区支部は、平成15年12月に発足し、今年は2年度目を迎えております。現在の会員数は、83名（内訳 陸；54名、海；11名、空；18名）です。

今年の活動現況を紹介します。

1 定期総会及び懇親会

7月30日（土）、岡山市内で、定期総会及び懇親会を実施しました。

前年度の事業報告等と次年度の事業計画等を審議した後、一部、役員改選をしました。

改選された役員 新会長 成久 洋之（#3 陸）

新幹事長 坪井 英三（#10 陸）

総会に引き続き実施された懇親会では、宇佐美岡山地方連絡部長（#25 陸）から、防大入試の志願者・合格者等の現況説明があり、また奥田弁護士（#31 陸）からは、自己の弁護士活動の現況紹介がありました。

2 ゴルフ大会

10月22日（土）、岡山ゴルフ倶楽部（帯江コース）で、武内幹事（#13 空）のもと、12名の参加者を得て、ゴルフコンペを実施しました。

優勝者（ダブルペリア方式）は、坪井英三氏（#10 陸）、またベストグロスは、神田克正氏（#7 空）の83（44・39）でした。

3 釣り大会

10月29日（土）、瀬戸内海（児島沖～多度津沖周辺）で、竹村幹事（#12 陸）のもと、6名の参加者を得て、釣りの会を実施しました。

あいにく天候は雨でしたが、釣果はイイダコ・メバル等、大漁でした。

主要な行事以外では、「岡山県下の駐屯地・地方連絡部の創立記念行事等」に参加し、また、岡山地方連絡部を通じ、「岡山県防大父兄会との連携」を模索しております。

まだ、産声を上げたばかりの支部ですが、会員相互の親睦・交流を主体に、来年も活動を継続していきます。

広島防衛大学校同窓会の活動状況

広島防大同窓会事務局

新年明けましておめでとうございます。

防衛大学校同窓生及びご家族の皆様におかれましては、今年もより飛躍の年として明日に向かって邁進されているものと推察しております。

昨年に引継ぎ今年も、現役同窓生は、国の平和と安全はもとより国際貢献の御旗のときわめて重大な任務を背負い各地で活躍しております。

自衛隊の任務は、実任務が主となり、国内では災害派遣、海外でのゴラン高原のPKO、インド洋での洋上補給、イラクサマワでの人道復興支援及びスマトラ沖の大地震による大津波・パキスタンでの大地震に伴う国際緊急援助隊の派遣等国际貢献に敢然と立ち向かっております。

これらの任務遂行の中で現役同窓生は、その中核として完璧に任務を達成しております。この同窓生に対し深甚なる敬意と感謝の気持ちを影ながら送っております。

我々民間人になったOBは、現役同窓生の任務の完遂と無事の帰国を祈念する以外彼らに声援を送る方策を持っていない状況です。

広島防衛大学校同窓会（以下「広島同窓会」という）は、国家防衛と国際貢献という崇高な任務を担う現役同窓生に敬意を表するとともに、OB同窓生としてまた一民間人としてお役に立てることがあれば積極的に行動することにしております。

この一環として、一昨年は、イラクに救援物資等を輸送する海上自衛隊を激励する行進に参加し現役同窓生始め隊員を激励しました。週刊文春の宮嶋記者から「賛成でもデモ、反対でもデモ」のタイトルで週間文春に掲載されました。（宮嶋茂樹記者は、イラク派遣中の隊員の活動状況を「任務」という標題で写真集を発刊しております。）

昨年は、イラク人道復興支援のため第13旅団（海田市）から選抜された隊員の激励・帰還行事に「頑張れ 国際貢献」



の横断幕と幟を持って激励しました。(写真参照)

また、海自艦艇のインド洋の派遣に対する出入港行事に同様の横断幕と幟をもって積極的に参加し現役同窓生のみならず派遣隊員を激励しております。(写真参照)

このように広島同窓会は、国際貢献のため派遣される第13旅団の隊員及び呉在籍艦艇の隊員に対し、同窓会としてできるささやかな支援を致すことにしております。

また、広島同窓会は、例年定期総会・講演会・懇親会の開催と春・秋行事としてハイキング・テニス・ゴルフコンペを実施し、広島経済圏で在住している同窓生相互の緊密な交流を推進するとともに各種団体との交流を図っております。昨年度諸行事に参加しました同窓生及び家族等は、延べ300名近くとなっております。

春・秋季行事は、郷原GCと瀬野川GCでゴルフコンペを、陸自海田市駐屯地でテニスを、春は、広島「尾道三山巡り」(別途写真送付)、秋は、「弥山」のハイキングを実施し、延べ200名近くの同窓生その家族、自衛隊OB及び協力会員等が参加し盛況裏に終了しました。

防衛大学校創立半世紀を過ぎ、同窓会本部では、地方組織のあり方について検討されております。広島同窓会では、同窓会活動の活性化と地方在住・勤務している同窓生に何らかの恩恵を感じさせることが同窓会活動を活発化させるものと考え、数年前から同窓会活動の軸足を少しずつ東京中心から地方へと変えることを提言してまいりました。ようやくその提言が実現される兆候が見えてきつつあります。

地方では、同窓会活動に資金援助することは不可能であり、新たに同窓生から資金を徴収しささやかに同窓会活動を維持・運営しております。例年本部の予算計画は、ほとんどが中央での活動予算であり、地方に対する予算は半世紀過ぎても全く考慮されていなのが現状と考えます。

旧態以前の計画・予算配分等に改革のメスを入れ抜本的な改革をすることが急務と思慮します。地方の同窓生は、改革に向けての本部の強力なリーダーシップが同窓会活動の活性化に必要不可欠と考えております。地方組織作り等夢のある施策を期待しております。



ハイキング

九州防大同窓会の活動概要

会長 山口 賢介(陸7期)

同窓生の皆様には、お元気でご活躍のことと存じます。九州防大同窓会も年々退職会員も増加しましたので、九州本部の役員を充実し、活動も活発になっています。今年度の九州防大同窓会の活動について、紹介します。

九州防大同窓会は、今年度も年間7回(約2ヶ月に1回)の本部事務局会同(内1回は各県支部長会議、1回は各期代表者会議)を実施しています。毎年2月に九州防大同窓会総会・懇親会(約200名余り参加)を行なうほか本部及び各県に担当を区分して、夏季定期訓練中の防大生の激励と、陸・海・空自衛隊記念行事へ参加しました。今年度は、特別に4師団・8師団のイラク復興支援群への激励、行事への参加等、のほか例年どおり九州防大同窓会ゴルフ大会(60名余り参加)を行いました。各県支部は、支部行事として防大同窓会総会・懇親会等の活動を実施しています。各県支部独自の活動も年々活発となっています。また、今年度は、「日露戦争戦勝百周年記念行事」がおこなわれましたので、九州防大同窓会福岡支部として「日本海海戦戦勝記念行事」に協賛(6年間続けています)の他福岡支部の有志による水交會講演等の支援、奉天会戦戦勝記念行事の支援及び鹿児島支部による鹿児島における「日本海海戦戦勝記念行事」に協力等が実施されました。さらに、昨年度の福岡FM放送「活躍する自衛隊」に引き続き、今年度は「日本の誇り自衛隊」という番組のコメンテーターとして、福岡地区の事務局のメンバーを中心に出演し、第四師団司令部・西空司令部の協力を得て、自衛隊の活動についてPRしました。

福岡FM放送「日本の誇り自衛隊」のコメンテーターとして出演
平成17年5月15日から6月26日までの6週にわたり、福岡FM放送で日曜毎に2時間半の生放送番組で、「日本の誇り自衛隊」が放送されました。

九州防大同窓会では、福岡の有志による参加ということで、同窓会事務局のメンバーを中心に、コメンテーターとして参加し、自衛隊の活躍状況を、体験を交え説明しました。

2時間半の各テーマと出演者は次のとおりです。

- 1 国民と自衛隊(陸)

9期 竹下 治雄	13期 西山 洋
16期 小西 泰巳	
- 2 国民と自衛隊(海・空)

9期 市来 徹夫	9期 福村 郁信
12期 森岡誠一郎	
- 3 災害派遣と自衛隊

8期 古川 詳翁	12期 藤井 敬文
15期 松尾 隆二	
- 4 国際平和維持活動と自衛隊

9期 竹下 治雄	9期 福村 郁信
18期 家村 茂美	
- 5 国防と自衛隊

11期 須ヶ崎了英	12期 森岡誠一郎
14期 徳永 喜憲	
- 6 新防衛計画と自衛隊

9期 市来 徹夫	9期 千輪 俊明
11期 吉田 邦雄	

九州防大同窓会の主な役員を紹介します

九州本部事務局

会 長	7期	陸	山口 賢介
副会長（現職）	15期	陸	亀田津治男
同（同）	24期	海	三木 伸介
同（同）	17期	空	石渡 幹生
同（退職）	7期	陸	伊藤 宏美
同（同）	9期	空	市来 徹夫
事務局長	9期	陸	竹下 治雄
事務局次長	20期	海	河野 聡
総務部長	12期	陸	藤井 敬文
事業部長	11期	陸	中村 哲示
会計部長	13期	陸	西村 長治

各県支部

福岡県	支部長	7期	陸	伊藤 宏美
	事務局長	9期	陸	竹下 治雄
佐賀県	支部長	7期	陸	真崎 峰夫
	事務局長	12期	陸	田中 豊博
長崎県	支部長	7期	陸	中里 紀一
	事務局長	10期	海	樋口八州太郎
大分県	支部長	7期	陸	小俣 健二
	副支部長	8期	陸	船石 雅信
	事務局長	7期	陸	澤村庄次郎
熊本県	支部長	7期	海	壇 崎次郎
	事務局長	9期	陸	佐藤 和美
宮崎県	支部長	6期	陸	後藤田壽司
	副支部長	6期	空	槌田 征治
	事務局長	4期	陸	阿万 哲士
鹿児島県	支部長	9期	陸	麓川 昭憲
	副支部長	9期	海	立元 四郎
	事務局長	11期	陸	福島 卓

文責 九州防大同窓会事務局長 竹下 治雄

鹿児島県防大OB会

鹿児島県防大同窓会・事務局長 村山 文彦（陸14期）

鹿児島県防大同窓会は発足以来4年目となり、退官し帰郷する多くの会員増などにより、現在 麓川会長（9期陸）以下115人の会員を擁し、人員数・活動内容も逐年充実してきました。

主要な行事としては、総会（恒例の現役帰省者も含めての）、年末懇親会、年2回のゴルフ大会、防衛大生の夏季合宿（国分・鹿屋）、激励会、各自衛隊・地方連絡部行事への参加などを継続実施しています。

昨年からは、ボランティア活動・研修会なども計画実施していますが、今年は桜島・錦江湾横断水泳（4.2キロ・支援艇140艇、県内外の100チーム400人が参加）のボランティア支援活動を実施しました。

昨年は伝統の行事でありながら、安全スタッフが集まらず、開催できなかった経緯があり、今回は鹿児島青年会議所が復活を目指し、大会を初めて運営することになり、一年掛かりで準備を進めてきたが、関係者を通じて防大OB会にも「安全スタッフ」としての参加打診があり、数度の準備委員会や



予行にも参加・助言するなど積極的に参画してきました。

当日（海の日）は、麓川会長を始め、OB会員15名が参加し、全員早朝6時には、桜島フェリーで出発の桜島に渡り、海上本部、陸上本部長の補佐、或いは海上スタッフとして乗船し審判員を勤めるなど、防衛大時代の遠泳を思い出しつつ、大会の安全を支える中心的役割を担う活動に汗を流しました。

後日行われた反省会・懇親会でも、大会本部から「遠泳などの行事開催や安全管理についての豊富な経験」を有する防大OBのボランティア活動に感謝し、今後も大会の継続と発展に協力していきたいと期しているところです。

その他、日頃多くの会員が、県内各種防衛諸団体の活動に積極的に参画し、今後の中心的な役割を果たすべく、それぞれの立場で活躍していることを紹介し、鹿児島からの便りと致します。

沖縄支部

沖縄地域支部事務局

沖縄地域支部では、那覇市内のメルパルク沖縄において毎年恒例となった平成17年2月6日（日）の沖縄寮歌・大学の歌祭に今年もOB3名を含む17名の会員が参加しました。

参加会員は、卒業後約30年から数年までと幅はありますが、それぞれ防大学生時代を思いだし懐かしい制服に身をまとい、海軍兵学校及び陸軍士官学校の応援出演をするなど、各大学の寮歌に耳を傾けてながら出番を待ちました。

今年は、応援出演において昨年よりも充実した応援ができる様にと、前夜、那覇市内のとある場所に集合し、海軍兵学校及び陸軍士官学校の校歌の練習を行って本番に臨みました。

いざ、出番には、恒例の前口上の後、逍遙歌の1番と4番を全員で声高らかに歌い上げ（写真）、防衛大学校の名を高らしめました。



小原台クラブオープンセミナー 2005年度活動状況

山本 晃生 (空33期)

小原台クラブオープンセミナーは小原台クラブの重要な活動として、2004年4月からほぼ毎月、開催しております。この目的は、異業種・同業種の同世代の若者が一堂に会しお互いに勉強する、ことです。特にセミナー終了後での懇親会では心温まる人間関係が育つことを希望しています。

参加範囲は20期代以降の当クラブ会員及びその友人・知人等、防大出身者のみならず幅広く参加を呼びかけております。ただし、連絡手段はメールのみですので、メールアドレス保有者であることが大前提であることは言うまでもありません。

回を重ねるごとに登録メンバーは増加し、2005年10月末では約300名となりました。メンバーの大半は情報産業界にて現役として活躍している若者です。当然のことながら個人情報保護法の配慮から、フォーカスシステムズ社の協力を得て高いセキュリティ技術を取り入れた名簿情報の管理運用に努めております。

小原台クラブの若手会員が中心となったビジネスリレーションの輪は、時代の変化を先取りして大きくなりつつあります。2005年の活動実績は次のとおりです。

- 第1回 2月24日(木)(於大手町)
講 師：鎌田智氏(弁護士、29期)、戸越一成氏(税理士、38期)
テーマ：「近況報告」
参加者：49名
- 第2回 4月5日(火)(於大手町)
講 師：中谷 元氏(元防衛庁長官、24期)
テーマ：「日本の国家戦略」
参加者：62名
- 第3回 5月11日(水)(於大手町)
講 師：番匠幸一郎氏(陸幕広報室長、24期)
テーマ：「イラクでの自衛隊活動について」
参加者：57名
- 第4回 6月10日(金)(於大手町)
講 師：横山武敏氏(元キャノン(株)宇都宮工場長、12期)
テーマ：「勝つための生産革新・業務改革：キャノン、その強さの秘密」
参加者：66名



- 第5回 7月22日(金)(原宿「クラブ水交」)
講 師：内田光氏(ソニー生命保険(株)、26期)
テーマ：「知って得するお金の話」
参加者：48名
- 第6回 9月9日(金)(於大手町)
講 師：山川隆義氏(株)ドリームインキュベータズ取締役副社長)
テーマ：「ベンチャー企業の成長」
参加者：58名
- 第7回 10月21日(金)(於大手町)
講 師：平間洋一氏(法学博士、元防大教授、元防大図書館長、元筑波大講師(国際関係)、元常盤大(日本史)、1期)
テーマ：「再考、日本の戦争」
参加者：48名
- 第8回 11月18日(金)(於大手町)
講 師：大和俊彦氏(シスコシステムズ(株) 執行役員、CTO、CSO)
テーマ：「ネットワークの光と影」
副 題：「IP電話と放送通信の融合、固定電話と携帯電話の融合(FMC)、ユビキタス」
参加者：65名
- 第9回 12月
忘年大懇親会

★オープンセミナー運営委員

- 丸谷 敏博：(株)フォーカスシステムズ、24期
金子登志夫：オープンテクノロジー(株)代表取締役、26期
内田 光：ソニー生命保険(株)、26期
安江 寿夫：キャノン(株)
山本 晃生：キャノン(株)、33期
宮田 康：(株)ラック、36期
大橋 強：新日鉄ソリューションズ(株)

随時、小原台オープンセミナーのメンバーを募集しておりますので、セミナー事務局：山本(yamamotokst@yahoo.co.jp)にご連絡ください。



会費納入状況

17.11.18現在

期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数				期別	会員数	完者 納数	完率 納%	未完納者数			
				陸	海	空	計					陸	海	空	計
1	339	320	94	11	6	2	19	26	510	471	92	26	7	6	39
2	359	347	97	8	2	2	12	27	392	381	97	8	1	2	11
3	484	452	93	17	12	3	32	28	455	424	93	17	8	6	31
4	465	437	94	20	7	1	28	29	397	363	91	17	7	10	34
5	529	483	91	26	11	9	46	30	415	348	84	48	13	6	67
6	478	432	90	37	6	3	46	31	436	414	95	15	6	1	22
7	503	460	91	29	7	7	43	32	410	360	88	31	13	6	50
8	467	420	90	34	8	5	47	33	453	381	84	45	19	8	72
9	498	447	90	35	6	10	51	34	432	377	87	40	9	6	55
10	498	453	91	27	8	10	45	35	502	483	96	11	5	3	19
11	495	448	91	28	8	11	47	36	358	348	97	6	2	2	10
12	466	416	89	30	9	11	50	37	388	351	90	16	7	14	37
13	468	418	89	32	9	9	50	38	342	268	78	60	10	4	74
14	492	457	93	20	2	13	35	39	351	323	92	8	11	9	28
15	463	448	97	9	3	3	15	40	393	333	85	34	21	5	60
16	428	404	94	9	4	11	24	41	415	373	90	24	15	3	42
17	498	453	91	20	11	14	45	42	417	376	90	19	12	10	41
18	423	396	94	9	7	11	27	43	437	390	89	23	16	8	47
19	446	412	92	14	18	2	34	44	389	206	53	134	44	5	183
20	383	352	92	17	3	11	31	45	357	142	40	151	20	44	215
21	491	470	96	12	3	6	21	46	367	229	62	71	7	60	138
22	475	412	87	31	9	23	63	47	401	359	89	26	9	7	42
23	412	390	95	8	8	6	22	48	439	388	88	24	14	13	51
24	451	418	93	8	18	7	33	49	*294	294	100	0	0	0	0
25	425	403	95	10	4	8	22		337	294	87	32	6	5	43

会員数の項：会費納入対象者（留学生を除く防大卒業者数）。

49期生の欄：*印の項は、幹候校入校者に対する数値。

会費納入のお願い

防衛大学校同窓会事務局長 新井 宏

本年度は、49期生の陸上、海上及び航空要員ともに幹候補生学校在校者全員に完納していただきました（上表参照）。衷心より御礼申し上げます。

また、その他の期においても納入率の向上のために、期生会長及び代議員の皆様にご助力をいただき、成果が出ております。重ねて御礼申し上げます。

同窓会事務局では、「あり方検討」の一環として同窓会の経済的な基盤を更に固めるべく、18年度以降学校等を訪問し、会費納入促進活動を推進することにしております。

同窓会活動の趣旨を理解して頂き、会費未納の方（事務局で把握しておりますので下記連絡先にご確認下さい。）には、次により会費納入をお願い申し上げます。

納入先 郵便局の場合：口座番号 00260-5-□□24826（百万及び十万の桁は無記入）

加入者名 防衛大学校 同窓会

通信欄 期別、要員別及び部隊名（現役の場合）を記入

振込経費 120円

銀行の場合：三井住友銀行 飯田橋支店 口座番号：1270680

防衛大学校同窓会 経理部長 小宮 哲夫

なお、銀行振込の場合は、納入者の確認及び完納証等の発送のため、必ず振込者氏名、住所、期別、要員別、振込期日をeメール、Fax、電話等で下記にご連絡下さい。

連絡先 同窓会本部事務局 〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2
Tel/Fax 03-3351-8910 (自即電話 8-6-28895)
eメール honbu@bodaidsk.com

【参 考】

普通会費 防大本科卒業生

卒業時の3尉俸給月額(1号俸)の1/4(千円未満切捨)

防大研究科卒業生(一般大学卒業者)(18年度改正)

卒業年度の3尉俸給月額(1号俸)の1/8(千円未満切捨)

延滞金 1,000円×(完納年度-3尉任官年度又は研究科卒業年度)

(防衛大学校同窓会会費に関する細則より)

会費算出例:44期生で過去に分納がない場合

普通会費 60,000円、完納年度 18年度、3尉任官年度 12年度(13.3)

18年度納入額 60,000円+1,000円×(18-12)=66,000円

(詳細は同窓会事務局までお問い合わせ下さい)

同窓会本部・支部等の役員紹介

[平成17年度同窓会本部役員]

会 長	佐伯 聖二	7(海)	機関紙担当	西 昇	14(海)	MCI担当	新治 毅	13(空)
副会長兼事務局長	新井 宏	9(陸)	同	佐田 重夫	15(陸)	HP技術担当	荒木 紀夫	8(空)
副 会 長	藤田 幸生	9(海)	H P 担 当	同		常駐事務局員	塩川 太恵	
副会長兼理事長	竹河内捷次	9(空)	人 事 担 当	寄田 修	14(陸)			
理 事	長谷川 語	10(海)	同	飯田 俊明	14(海)	小原台事務局		
同	原 充男	10(空)	同	徳田 正行	15(空)	事 務 局 長	川上 潔	17(空)
同	佐藤 哲	12(陸)	経 理 部 長	小宮 哲夫	13(海)	事務局長補佐	高橋 丈雄	23(陸)
同	馬場 順昭	13(空)	経 理 担 当	山根 峰治	14(陸)	総 務 部 長	新開 仁司	22(海)
同	寺崎 芳治	20(陸)	同	平田 昭文	15(海)	総 務 係 長	吉村 政人	37(陸)
同	河野 克俊	21(海)	同	三好 光男	15(空)	総 務 係 長	杉本 裕高	41(陸)
同	内田 雅寛	20(空)	事 業 部 長	青木 吉則	13(陸)	広 報 係 長	平位 大	36(陸)
会 計 幹 事	尾頭 誠	8(空)	事 業 担 当	石井 利博	14(陸)	広 報 係 長	谷口 幸輔	43(空)
同	中埜 和男	10(陸)	同	鈴木 健	15(陸)	事 業 部 長	田原 俊幸	21(空)
同	長谷 勇	11(海)	同	土屋 勝政	14(陸)	企 画 係 長	小笹幸一郎	34(空)
			同	小島 健二	14(空)	企 画 係 長	岩切 主税	43(空)
本部事務局員			同	中治 一秀	14(空)	事 業 係 長	佐藤 吉範	37(海)
事 務 局 長	新井 宏	9(陸)	同	加藤三千夫	15(陸)	事 業 係 長	河本 定彦	45(陸)
総 務 部 長	後藤 英二	13(陸)	同	松永 寛	15(海)			
総 務 担 当	小津 光由	14(陸)	同窓会室整備	井出 順	13(海)			
同	飯島矢素夫	15(陸)	担当(小原台)					

[地域支部等役員(平成17年度)]

北部地域支部	支部長	工藤 義弘	(12・陸)	広島地区支部	支部長	土手 義孝	(8・海)
東北地域支部	同	小関 隆久	(6・陸)	福岡地区支部	同	伊藤 宏美	(7・陸)
西部地域支部	同	山口 賢介	(7・陸)	長崎地区支部	同	中里 紀一	(7・陸)
沖縄地域支部	同	藤井 建吉	(7・陸)	佐賀地区支部	同	真崎 峰夫	(7・陸)
栃木地区支部	同	鯉沼 義則	(1・陸)	熊本地区支部	同	壇 崎 次郎	(7・海)
東海地区支部	同	森 敏	(5・空)	大分地区支部	同	小俣 健二	(7・陸)
北陸地区支部	同	久保 正佳	(3・陸)	宮崎地区支部	同	後藤田壽司	(6・陸)
岡山地区支部	同	成久 洋之	(3・陸)	鹿児島地区支部	同	麓川 昭憲	(9・陸)
関西地区支部	同	羽藤 忠和	(9・陸)	小原台クラブ	会 長	岩崎 俊雄	(9・陸)

期生会会長・代議員名簿

17年12月1日現在

期別	会 長	代 議 員		
		陸	海	空
1	吉 川 圭 祐(海)	荒 武 良 弘	岡 田 毅	青 柳 隆 郎
2	吉 崎 格(陸)	吉 崎 格	水 野 信 夫	米 倉 隆
3	永 島 脩一郎(空)	国 谷 裕	松 本 昭 一	山 下 民 夫
4	椎 崎 博 理(海)	大久保 浩	辻 口 利 文	原 田 武 久
5	隈 部 正 則(陸)	三 浦 天 士	藤 川 耕 一	近 藤 五 朗
6	高 橋 伸 治(空)	大 窪 哲 哉	杉 本 光	星 野 元 宏
7	落 合 峻(海)	大 塚 忠 宏	高 木 基 博	北 原 彰
8	北 川 文 夫(空)	中 條 豁	本 間 宏	白 川 新
9	磯 島 恒 夫(陸)	小 島 捷 利	藤 田 幸 生	鈴 木 一 嘉
10	長谷川 語(海)	嶋 野 隆 夫	小田倉 光 伸	兒 玉 秀 正
11	石 川 亨(海)	内 村 彰 和	吉 原 征 義	赤 羽 益 三
12	先 崎 一(陸)	山 本 公 志	上 村 堯 彦	寺 田 治 夫
13	山 下 輝 男(陸)	関 芳 雄	平 井 良 彦	花 岡 芳 孝
14	吉 田 正(空)	石 井 利 博	斎 藤 隆	稲 葉 憲 一
15	今 村 功(陸)	佐 伯 義 則	小 林 幹 夫	江 口 啓 三
16	江 藤 文 夫(陸)	石 川 由喜夫	小豆野 実	肥 後 賢 治
17	河 野 美 登(海)	鈴 木 陽	河 野 美 登	永 田 久 雄
18	持 永 昇 三(海)	木 下 典 夫	岩 崎 繁 美	笠 原 久
19	酒 井 健(陸)	酒 井 健	角 田 伸 吾	上 田 完 二
20	佐 藤 秀 樹(陸)	西 村 智 聡	加 藤 耕 司	土 橋 一 太
21	彌 田 清(空)	竹 田 重 樹	田 尾 輝 雄	奥 村 芳 樹
22	宮 下 寿 広(陸)	盛 一 丈 嗣	山 口 透	福 井 正 明
23	岩 本 豊 一(陸)	岩 崎 親 裕	細 谷 正 夫	早 坂 正
24	高 橋 均(海)	櫻 木 正 朋	槻 木 新 二	岩 成 真 一
25	高 鹿 治 雄(海)	田 中 良 夫	徳 丸 伸 一	吉 田 浩 介
26	屋 代 律 夫(陸)	増 田 潤 一	大 保 信 一 郎	佐々木 金 也
27	小 林 茂(陸)	小 林 茂	副 島 尚 志	大 浦 弘 容
28	田 浦 正 人(陸)	田 浦 正 人	畠 野 俊 一	遠目塚 進
29	柴 田 昭 市(陸)	中 村 浩 之	中 尾 剛 久	村 上 和 彦
30	堀 切 光 彦(陸)	山 崎 繁 樹	森 田 義 和	小 田 紀 彦
31	高 山 博 光(陸)	山 根 直 樹	今 村 靖 弘	常 井 隆 志
32	榊 原 吉 典(空)	池 田 和 典	平 井 良 和	池 田 和 典
33	中 塚 千 陽(空)	山 根 寿 一	真 殿 知 彦	沖 野 正 敏
34	佐 藤 信 知(空)	大 谷 勝 司	福 田 達 也	小笠原 卓 人
35	植 森 治(空)	中 迫 博 文	保 科 俊 明	右 田 竜 治
36	足 達 好 正(陸)	足 達 好 正	塩 崎 浩 之	寺 崎 隆 行
37	宇佐美 和 好(空)	小 川 隆 宏	浦 口 薫	宇佐美 和 好
38	石 井 浩 之(空)	森 本 康 介	濱 崎 真 吾	霜 田 豊 英
39	湯 下 兼太郎(陸)	湯 下 兼太郎	平 田 利 幸	竹 岡 功 二
40	清 水 徹(海)	小 澤 学	川 野 邦 彦	大 石 和 浩
41	堤 田 和 幸(海)	村 上 淳	小 河 邦 生	中 谷 大 輔
42	武 田 和 克(陸)	武 田 和 克	中 尾 喜 洋	山 口 嘉 大
43	鎌 田 淳(空)	澤 繁 実	戸 永 竜 太	岩 切 主 税
44	高 橋 秀 典(海)	鈴 木 攻 祐	阿 部 直 樹	原 田 理
45	庄 司 秀 明(陸)	青 山 佳 史	岡 澤 智 和	坂 田 靖 弘
46	原 田 岳(海)	石 岡 直 樹	石 川 俊 紀	寺 林 洋 平
47	吉 水 憲太郎(陸)	清 田 裕 幸	笠 原 健 治	那 須 悠 花
48	和 田 嵩 一(海)	桐 谷 高 弘	柏 木 祐 一 郎	齋 藤 真 吾
49	山 上 剛 史(空)	納 谷 知 希	小 沼 洋 祐	山 上 剛 史

小原台に連絡調整室を整備

防衛大学校学生会館4階に連絡調整室を整備中です。

防衛大学校の発展のための防大同窓会の活動は、同窓会本部及び同窓会小原台事務局が連携して行い、防衛大学校における「防大同窓会に関する連絡調整等の」窓口は学生課が担当されています。

防大同窓会では、防衛大学校との連絡調整等を充実させ、防大同窓会の活動を更に効果的に実施すると共に防大同窓会小原台事務局の活動拠点とする場所を17年度に整備することを目指して検討してきました。

その結果、防衛大学校として学生課の「連絡調整室」を整備することになり、本年3月落成の資料館内に開設した顕彰室に殉職者の遺影・遺品等が移転されて空き室となった学生会館4階の一室を学生課と連携して整備中です。17年末には概ね備品等も整備され使用できる予定です。

防大同窓会小原台事務局は、防衛大学校に勤務している同

窓会員で構成されており、それぞれの業務・連絡調整等は、それぞれの勤務場所で行っていますが、連絡調整室を使うことができるようになり、パソコン、机、応接セット等が準備され、会議、連絡調整等が実施できるようになります。

連絡調整室使用の細部は、防衛大学校学生課と更に調整することになりますが、連絡調整室の整備目的に即して円滑かつ効率的に使用できると共に有効活用したいものです。我々の母校、防衛大学校の小原台事務局から現在の防衛大学校の状況等を発信していただき、同窓会活動が一層充実したものになることを期待しています。



井出・平記

名簿管理に関するお知らせ及びお願い

I 利用目的及びプライバシーポリシー

17年4月の個人情報保護法施行に伴い、同窓会名簿管理のあり方について、次のとおり利用目的を明確化するとともにプライバシーポリシーを確立しました。名簿管理は同窓会存立の基本的要件であり、会員皆様のより一層のご理解ご協力をお願い致します。

1. 利用目的

同窓会本部は、同窓会設立以来、会員の相互親睦、母校への支援、防衛思想の普及等を目的に各種事業を推進するなど、同窓会の充実発展に努力してまいりました。同窓会名簿は、これらの各種事業活動を推進するため不可欠でありかつ同窓会存立の基本であると考えております。

同窓会本部では、同窓会のさらなる充実発展のため、次の目的で皆様の個人情報を利用又は提供させて頂きたいと考えております。

- (1) 同窓会各種事業推進のための連絡
- (2) 機関誌「小原台」の刊行（業者に郵送先を提供）
- (3) 会員の慶弔の実施
- (4) 期生会並びに校友会、教務班等グループ活動への協力
- (5) 地域支部等の活動への協力

2. プライバシーポリシー

個人情報の取り扱いにあたっては、情報保護の重要性を深く認識し、個人情報に関する法令、その他の規定を遵守するとともに次のプライバシーポリシーに従い皆様の個人情報の適切な保護に努めてまいります。

- (1) 会員皆様の個人情報は、利用目的の範囲内で収集、利用させていただきます。
- (2) 法令等に規定する場合を除き会員皆様の承諾なしに目的外の利用及び提供はいたしません。
- (3) 会員の皆様から、個人情報の照会、修正、削除等を希望される場合は、同窓会本部事務局総務部担当者へご連絡いただければ、速やかに対応させていただきます。
- (4) 個人情報へのアクセス、破壊、改ざん及び漏洩などしないように適切に管理します。

II 会員の異動等に伴う名簿修正

従来、名簿管理は防衛庁関係部署のご協力による情報提供と部外委託により実施していましたが、個人情報保護法制定に伴い、防衛庁関係部署からの情報入手と部外委託が困難となりました。

このため、各期生会のご協力なしに名簿の維持管理は出来ない状況にあります。一昨年から名簿の修正は期生会代議員にお願いして参りましたが代議員への負担が過大になる等の問題がありました。今年度からは、代議員の負担軽減と送達効率化のため要修正項目を厳選し削減するとともにメールの併用等送達手段の多様化を図りました。

今年度も、期生会代議員に8月の定期異動等を基準に名簿の修正をお願いしましたがご多忙な時期にもかかわらずご支援ご協力ありがとうございました。次年度以降も8月の定期異動等を基準に10月中旬までに年1回の修正をお願いすることになりますので引き続きご支援ご協力をよろしくお願い致します。

また、会員の皆様には各期生会代議員への積極的ご協力をよろしくお願いいたします。

III 同窓会ホームページを活用した異動連絡等

最近のインターネットの普及は目覚ましいものがあり同窓会としてもインターネットの積極的活用を図っております。インターネットを通じた会員の異動通知等は、正確性、迅速性及び安全性はもとより、管理の効率性からも極めて有効であると考えています。そこで、年1回の定期修正の補完的手段として、同窓会ホームページに「異動連絡・ご意見表」の項を試験的に設け、住所、勤務地の異動及び本部に対するご意見をインターネットを通じて連絡できるように致しました。

今回、49期生陸上要員の幹部候補生学校卒業後の新任地・職務等の連絡にこの利用をお願いしたところ積極的なご協力を頂きその有効性を確認できました。次年度以降も、実績を反映させ更に使いやすいものに改善して継続する所存であります。各期生会・会員皆様の積極的な活用をお願いいたします。

防大同窓会ホームページ：「お知らせ」→「名簿管理からのお知らせ」→「リンク」（最終ページ）→「異動連絡・ご意見表」

本部事務局長 新井 宏



17年度開校祭観閲行進

防大同窓会総会のご案内

平成17年度同窓会総会を下記のとおり開催いたします。
ご出席を賜りたくご案内申し上げます。

●日 時
平成18年3月22日(水)
15:30~20:30

●場 所
グランドヒル市ヶ谷
新宿区市谷本村町4-1
(TEL: 03-3268-0111)

●懇親会費
5,000円

1 総 会 15:30~16:50

2 講演会 17:00~18:30
演題

「最近の中国・朝鮮半島の情勢
(安全保障の面から)」

講師

前中国防衛駐在官 1 空佐(26期) 関 谷 智 行
前韓国防衛駐在官 1 陸佐(26期) 田 原 義 信

3 懇親会 18:40~20:30

参加される方は、同封の返信用「はがき」にて平成18年2月22日(水)までにお申し込み下さい。
(いずれにも参加されない方の返信は不要です。)

編集 西 昇・佐田重夫
印刷 (株)エイコープリント

防衛大学校同窓会本部連絡先

〒160-0003 東京都新宿区本塩町21-3-2

●局 線 TEL・FAX 03-3351-8910 ●専用線 TEL・FAX 8-6-28895
E/M: honbu@bodaidsk.com